

見ろお花！

ハハハハハハ！

# 台詞小説本

vol.2

目次 (著者名は敬称略)

にゃん子(?) 冒険記	著者…ネームレス	3
あいでんていてい	著者…きは	17
私は王女、あなたは執事	著者…みつちよ	25
海の勇者ライフセイバーズ5・5話	著者…RIDE	58
ふたつの孤独	著者…ロッキー・ラックーン	64
イラスト	作者…大和撫子	71
著者あとがき & メッセージ		74
編集後記		80
奥付		

表紙提供…大和撫子

挿絵提供…大和撫子、ピアノフォルテ

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における第2回クイズ大会(2013年8月3日)にて上位を取った方々による、合同小説本です。

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木

<http://soukenshi.net/perch/>

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ  
<http://soukenshi.net/perch/sp/quiz02/>

# にゃん子(？) 冒険記

著者…ネームレス

0. お嬢様の思いつきを全力で成し遂げる。それが執事の誇り

？「ハヤテく」

ハヤテ「何ですかお嬢様？」

？「…相変わらず早いな」

ハヤテ「執事ですから」

？「それを言えばなんでも許されると思うなよ」

ハヤテ「許されないんですか？」

？「場合によるな」

ハヤテ「そうですね。で、ご用件は」

？「うむ、実はな」

？「動物って可愛いって事ですよ(ハート)」

ハヤテ「へ？」

？「マリア！私のセリフを取るな！」

マリア「あら、すいませんでしたわ、な…いえ、お嬢様」

？「ちょっと待て！普段は名前で呼んでるだろう！？？」

「いかそろそろ名前呼べよ！！いつまで私の名前の部分

が？のままなんだよ！！」

マリア「じゃあシャ○」

シャ○「おおおとおおおい！？違うだろ！？？」

ハヤテ「ま、マリアさん。何時になくはしゃいでますね」

マリア「こういう機会でも無いと出来ない事ってあるじやないですか」

ハヤテ「僕としては本題に入ってもらえると助かるんですか…」

シャ○「いいから名前を呼べよ！？？」

マリア「少しうるさいですよナギ」

ナギ「理不尽だろおおおとおおお！！！」

ハヤテ「あ、あの」

マリア「ああ、すいませんハヤテくん。少し遊び過ぎました」

ナギ「少しじゃない気がするがな…」

マリア「言ってしまうえば、ナギがまた影響されたのですわ」

ハヤテ「…ああ」

ナギ「納得するなあああああああああ！！！」

ナギ「とまあ、私もペットにお使いさしてみたいのだ」

ハヤテ「最近アニメにもなった『犬とハサ○は使いよう』の主人公のように、動物に買物させたいという事ですね？」

ナギ「今私が言ったな」

ハヤテ「はは、やだな。一応ですよ、一応。」

ですがお嬢様。タマはその…大きいですし、人前に出るのは向いてないかと…」

ナギ「なーに。タマは少し大きい立派な猫だ」

ハヤテ(立派な虎です)

ナギ「それに、いざとばったらハヤテがどうかしてくるよな？」

ハヤテ(う、目が凄いきらきらしてる…。断れない)「…

了解しました。必ずやタマにお使いをさせてみせます!!!」

ナギ「おお!さすが私のハヤテだ!ついでにビデオ撮ってきてくれ!」

ハヤテ「え、」

マリア「…ハヤテくん、不幸な目に会わなければいいのですが…」

1. 二度ある事は三度ある、三度目の正直、まずは二度目が無いと始まらない

ハヤテ「はーい注目。」

第2回、東京で虎を飼うとどうなるのか会議」

タマ「お…おく」

ハヤテ「…まさか、この会議が2回目を迎える事になるとはな」

タマ「…ああ」

ハヤテ「いいか。今回は買い物だ。この前のように夜中にこっそり移動してはい終わりというわけにはいかない。しかもお嬢様が『ビデオ撮ってきてくれ!』と言ってきた以上、僕も影ながらフォローはするが代わりに買うことはできない。

今一度言うぞ。見つかったら間違いなく死ぬ!!!」

タマ「……………」

ハヤテ「アパートから元の暮らしに戻ってからも、結局お嬢様から無茶振りをされることは決して珍しい事ではない。だから全力でそれに応えるのが僕の仕事ではあるが、僕にも不可能がある。大事な事だから2回言うぞ。

見つかったら…命はなあい!!!」

タマ「……………」

ハヤテ「いいか!!ここからは自分を海外映画の主人公だと思つて行動しろよ!!」

ミッシュン・インポッシブル並みの緊張感を持って行動だ!!」

タマ「お：おう……!!」

ハヤテ「さて、作戦だが」

タマ「だがよく。作戦と言っても今回ばかりは……」

ハヤテ「大丈夫だ。はっきり言えば、かなり不安だが、あるアイテムに望みを賭ける」

タマ「…アイテム？」

ハヤテ「ああ。お前がアパートに移動する時に伊澄さんがくれた、“ニーベルングの首輪”だ!!」

タマ「…な、なにいいいいいいいい!!？」

2. 虎かと思つた？残念！猫でしたー！まさに外道！！

ガヤガヤ

タマ（…神よ。俺は何か悪いことをしましたか）

シラヌイ「にや？」

ハヤテ「とりあえずタマは首輪をつけ、猫を装いながら

本を買いにいくんた」

タマ「だ、だけどよ。俺、本屋までの道わからねえぜ？首輪の効果もどこまで有効かわからねえし……」

ハヤテ「大丈夫だ。危なそうだったら僕が救助に入る。

道についても心配ない。シラヌイが知っている」

タマ「シラヌイが？」

ハヤテ「その通り。馬鹿で愚鈍で短足で疑い深い虎のお前と違ってシラヌイはよく外に遊びに……て、うわあ!!

なんだよ急に!!」

タマ「うるせえ！俺はお嬢の帰ってくる場所を守る義務があるんだよ!!」

ハヤテ「…はあ。とにかく、タマ、お前はシラヌイと上手く対話して本屋まで買いに行くんだ。わかつたな？」

タマ「…それが最善ならしうがねえか」

ハヤテ「ああ。さらにシラヌイにはある仕掛けもした。

絶対に問題無い」

タマ(とは言ったものの、人が多すぎる!というかさつきから人がこっち見てるし!!)

通行人A「ねえ、あれって」

通行人B「…猫、だよね?」

通行人C「う…うん…?」

通行人D「随分大きいな…」

タマ(このギリギリな感じ怖いよ!くそ、さつきと用事済ませて帰るぞ!おい!)

シラヌイ「にゃ?」

タマ(早く本屋まで案内してくれ!)

シラヌイ「にゃにゃ!」

タマ「お、おい!速……………」

通行人E「え?今しゃべ…」

通行人F「気のせいかな?」

通行人ZZ「ジードー・アーシタ、ガンダZZZ、いきまーす」

タマ(さつきと用事済ませるとは言ったが速えよ!つい喋っちゃったじゃん!というかパイロットいるぞ!)

シラヌイ「にゃー!」

タマ(日頃の運動不足がたたってもう息が上がってやが

る。ま、待てシラヌイー!)

ハヤテ「…大丈夫かなー?」

3. 会話は全て録画されている

タマ「にやー！」

シラヌイ「にやー♪」

ハヤテ(よし、大丈夫そうだな。この調子なら何も起こらず買物物を遂行でき…)

？「綾崎く(ハート)」

ハヤテ「ぎやあああああああああああああ！！！！」

？「ここで会えるとは何という運命！やはり綾崎！お前は私のマイスイートハがつっ！？」

ハヤテ「気色悪いこと、言うなあああああああああああああああああ！！！！」

？「ぐ、ぐふ。綾崎、お前の愛…たしかに受け取った！」

ハヤテ「僕が君に与えたのは殺意ですよ」

？「おお！綾崎からついに気持ちを買ったぞ！」

ハヤテ「紛らわしい言い方するな！！」

？「がふっ」

ハヤテ「…はあ。で、何でこんな所にいるんですか虎鉄くん」

虎鉄「ふっ、それはお前が」

ハヤテ『お前がいるからだ』なんて言ったら通報しますよ」

虎鉄「おお！以心伝心！！やはり俺たちは結ばれるうんめぎやつ！」

ハヤテ「さっさと見え」

虎鉄「ふっ、ツンな綾崎も、またいい。

お嬢達に荷物持ちとして連れられて来たんだが、綾崎を見つけたから飛んで来た」

ハヤテ「泉さん？じゃあすぐ戻らないと…達？」

虎鉄「ああ」

ハヤテ(ああ、僕の危険信号が訴える。“逃げなきやダメだ”と)「虎鉄くん！僕用事があるのでこれ」

？「あー！ハヤ太くんだー！！」

？「おお、奇遇だなハヤ太くん」

ハヤテ(チィィィ。一足遅かったか！)

？「もー。虎鉄くんここにいたんだ」

虎鉄「ああ済まない。綾崎を見つけてつい興奮してしまっただ」

？「相変わらずの変態ぶりだな泉の兄は」

？「相変わらずのBLぶりだな泉の兄は」

泉「もー！二人ともー！！」

？「で、ハヤ太くんは何故逃げようとしてるのかな？」

ハヤテ「…おお。これはこれは政治家の娘である花菱美希さんに神社の巫女の娘である朝風理沙さん。奇遇ですね」

美希「うむ。それを言うのはいささか遅いな」

理沙「だが我々は寛大だ。許してやらんこともない」

ハヤテ「そうですね。ありがとうございます。それでは僕はこれで」

美希「まあまあハヤ太くん」

理沙「待ちたまえハヤ太くん」

ハヤテ「…何ですか」

美希「露骨に嫌な顔するな」

理沙「まあ君にとつても悪い事じゃない」

ハヤテ「早く要件を言ってください。僕は急いでるんです」

美希「我々は急遽、水着を買いに行くことにした！！！」

虎鉄「おお！！綾崎のみずぎゃっ！」

ハヤテ「そうですね。楽しんできてください」

理沙「ハヤ太くんは泉の水着を見たくないのか！？」

泉「ふええ！？私！？」

ハヤテ「泉さんに悪いですし僕は用事があるんです！」

美希「なら泉に聞いてみよう！」

理沙「どうなんだ泉！ハヤ太くんに見せたいのか！？」

泉「え？え？」

美希理沙「どうなんだ！！！」

泉「わ、私は…」

ハヤテ「ちよつと、泉さんが困ってるで」「いいよ」「え？」

泉「は、ハヤ太くんになら、その、見せても…いいよ」

ハヤテ「////////」

泉「////////」

ハヤテ「あ、あの！その、女の子がそう言う事を気軽に

言うもんじゃありませんよ！」

泉「だ、だよね！何かごめんね！変な事言っちゃって！」

ハヤテ「で、ですよねー」

泉「う、うん」

ハヤテ泉「あははははは////」

美希理沙「付き合いたてのカップルか！！！」

ハヤテ（あ！タマたち見失った！？）



4. 理不尽は主人公の宿命だ。そう思っていないとやっ  
られない

タマ(ハヤテの奴、ついて来てるんだろな…)

シラヌイ「にゃ♪にゃ♪」

タマ(こいつも信用できねえし、やっぱオレっちが頑張る  
しかねえ！)

…と言っても本屋の場所はわからねえんだよな)

シラヌイ「にゃー？」

タマ(シラヌイ頼むぞ。お前に全てが掛かってる！)

シラヌイ「にゃにゃ！」

タマ(よし！いざ)

子ども「あー！猫しやん！」

タマ(…へ?)

子ども「ふかふかー」

タマ(おい！離れろ！動けねえじやねえか！)

子ども「むにゃむにゃ」

タマ(寝るなああああああああああああ！…！)

通行人A「お、おいあれ」

通行人A「やばくないか」

通行人A「助けた方が…」

タマ(通行人Aどんだけいんだよ！というか親はどこだ

ちくしよう！)

子ども「ぎゅー」

タマ(ああもう！あの借金執事は何やってんだ！こうい  
う時に助けやがれ！…！)

シラヌイ「にゃー」

タマ(おおシラヌイ！助けてくれるのか！って、おい寝る  
な！そこはサイフ入ってる場所だぞおい！)

子ども「すやすや」

シラヌイ「…す…す…す」

タマ(…誰か助けて)

5. 偶然はあるものではない。作るものだ

タマ「よいしょ、よいしょ」

子ども「むにやむにや」

タマ「ふー、何とか人通りの少ない場所まで来たぜ。いつまでも彼処にいたら暴露ちまうかもしれないねえしな」

子ども「むにやむにや」

タマ「それにしてもこのガキはよく寝るな。

：おかげで俺は完全に身動きが取れなくなったが」(暴露の可能性があるからガキ連れて移動したとは言え、それは同時に助けも無いつて事だからな。人氣が無い以上、オレっちもこいつ置いて動くわけにはいかなくなっちゃまった)

シラヌイ「：すー：すー」

タマ「とうかなんでシラヌイまで寝てんだ！全く：。待てよ？子ども連れて人氣の無い場所まで来てるって：オレっちもしかして誘拐犯！？」

お、落ち着け俺。俺は猫だ。お嬢のペットだ。だから誘拐犯では無い。そもそもこれは保護だし俺が罪に問われる云われは」

？「：タマ？」

タマ「にやあああああああ！？」

？「？どうかしましたか？」

タマ(こ、この人はお嬢の友達の：そう、伊澄って子だ。び、びっくりした：て、俺が喋ったとこ見られてねえよな？)

伊澄「タマ？」

タマ「にや、にや」

伊澄「あら、その子はどうしたの？」

タマ「にやーにやー」(ここでこの子に気付いてもらえれば一気に解決！頼む！気付いてくれ！)

伊澄「なるほど、わかりました」

タマ(おお！)

伊澄「この子がついつい可愛くて攫っちゃった、ということですね(ドヤア)」

タマ「：……」

伊澄「でもダメですよタマ。いたいけな子どもを攫っては」

タマ「にやにやにや!!!？」

伊澄「では、まずこの子の親を探しましょう」

タマ(す、少し理想とは違うが良しとしよう)

伊澄「では行きましょう、タマ」

タマ(ふう、これで安心って、あれ？伊澄って子は何処に行った？)

伊澄「おや？ここは…。ダメですねタマも。ちゃんとして来てくれないと」

※ニューヨーク

タマ「おいおいおい、お嬢の友達何処に行ったんだよ。

まさか迷子じゃ。一瞬で消えるってどんな離れ業だよ…」

子ども「う、うん…ここは？」

タマ（あ、起きた）

子ども「あ、あれ？ここどこお？」

タマ（ん？目が潤んで…）

子ども「う、うえ…」

タマ「!!?」

子ども「うええええええええええええええええん!!!ママ

アアアアアアアアア!!!」

タマ「にやー!?!」（や、やばい。お嬢もこのぐらい小さい頃

が合ったとはいえ高いプライドから泣くことなんて殆ど無かった!オレっちがどうすればいいかなんて全く

わからない!）

子ども「うわああああああああああああん!!!!!!」

タマ「にや、にやー」（頼むから泣き止んでくれ!）

子ども「おや?あれは…」

子ども「ありがとうお姉さん!猫さん!」

親「ありがとうございます!ありがとうございます!」

?「いえ、無事に案内できて良かったです。それでは」

タマ（ふう、危ねえ。まさか偶然にもアパートの住人…た

しか千桜、だったかな。が通りかかってくれなんて）

千桜「それにしても…」

タマ「にや?」

千桜「…猫…だよな。うん。前に綾崎くんも猫って言っ

てたし。…うーん」

タマ（やべ!暴露る!）「にやにやにやー!」

千桜「あ…行ってしまったか。…うーん、猫だ猫…」



言葉は喋れないし、暴露る心配は無いわね」

タマ「にやにやにや！！」（返せよお嬢のバッグと金！）

？「うっさいわねー。ここじや中身も確認できない。と  
いうことで金ありがとね！！」

タマ（うおおおおおおおおお！！て、速  
っ！？）

タマ「はっは、くそ、このままじやお使いが達成できね  
え。シラヌイまで連れてかれちまった。これじやあお嬢  
に見せる顔がねえ！」（惨めだ。こんな事なら普段からも  
っと動いとけばよかった！）

？「そんなことは無いよタマ」

タマ「え？」

？「まだお使いは終わってない。主の願いを叶えるのが  
僕の仕事だ。だから、タマ。安心してここで待ってる」

タマ「は…ハヤテ…」

ハヤテ「すぐに取り返してくる！」

7. シラヌイの仕掛け

？「ふう、ここまで来ればもう大丈夫。じゃあ早速…」

シラヌイ「にやー」

？「え？ね、猫？」

パシヤ

？「だ、誰！」

ハヤテ「そこまです桂先生！」

雪路「あ、綾崎くん！？どうしてここに…」

ハヤテ「どうしてって、シラヌイにはぐれた時の為にG  
PSを仕掛けておいたので、それで追い掛けてきたんで  
すよ」

雪路「シラヌイ…？」

ハヤテ「その猫です」

シラヌイ「にや！」

雪路「え？じゃ、じゃあ。このバッグとさっきの大きい  
猫って…」

ハヤテ「三千院ナギお嬢様の正式なペットです」

雪路「……………」

ハヤテ「いやー、それにしてもGPS追い掛けて来たら、

まさか桂先生がいらっしゃるとは。思わず写真を撮ってしまいました」

雪路「!!!!」

ハヤテ「…返していただけますね？」

雪路「……………はい」

タマ「ハヤテの野郎、大丈夫か。時間は随分経つが…」

ハヤテ「あまり外で喋るなよ、タマ」

タマ「おお！ハヤテ！バッグは？シラヌイは？」

ハヤテ「両方無事だ」

シラヌイ「にやにや」

タマ「よ、良かった。もうお嬢に顔向けできねくかと」

ハヤテ「おいおい。タマ、お前の仕事はここからだろ」

タマ「そうだな。じゃあさっさと買って帰ろうぜ。今日はもう疲れたぜ」

ハヤテ「そうだな。僕も泉さんたちに連れ回されて疲れたよ」

タマ「……………おい、今なんて言った」

ハヤテ「え？泉さんたちに連れ回されて使えた、て」

タマ「…俺が散々大変な目に会ってた時に、お前はラブコメってんじゃねーよ!!!助けに来なかつたのもそのせいか!!!」

ハヤテ「わ!?こら、タマ!!!やめっ!!!うわあああああああああああ!!!」

8. 主とペット

マリア「あら、お帰りなさいハヤテくん。タマ…て、ハヤテくん。どうかしましたか？」

ハヤテ「はは、いつもの事ですよ…」

タマ「にゃー！」

シラヌイ「にゃー♪」

ナギ「おお！帰ってきたかタマ！本は買って来られたか？」

タマ「にゃーにゃー♪」

ナギ「おお！偉いぞタマ！マリア！今日はタマに肉をいっぱい食わせてやろう！」

マリア「はいはい。わかりました」

タマ「にゃー！」

ナギ「ハヤテ！ビデオはあるか！」

ハヤテ「はい。こちらに」

ナギ「なら今すぐ見よう！タマの勇姿をみんなで見届けようではないか！」

タマ「ふしゅー、ふしゅー」

ナギ「む？タマ…？」

ハヤテ「…寝ちゃいましたね」

マリア「あらあら。お肉いっぱい残ってますよ。よほど疲れたんでしょうね」

ナギ「うむ。このビデオ見てもタマが頑張ったのはわかるな！」

ハヤテ「そうですね」

マリア「シラヌイもよく頑張りましたね」

シラヌイ「にゃー」

ナギ「む？シラヌイも眠いか」

シラヌイ「くあく。…にゃう」

ハヤテ「今回はシラヌイも頑張りましたから」

ナギ「そうか…二匹ともよく頑張ってくれたな」

ハヤテ「お嬢様。僕たちも寝ましようか」

ナギ「そうだな。おやすみ、タマ、シラヌイ」

タマ「ふしゅー、ふしゅー」

タマ「う…ぐあく。それにしても、昨日はいろんな目に会ったな…。今日はゆっくり休みたいぜ」

ナギ「タマ」

タマ「にゃにゃにゃにゃ♪」

ナギ「おお！ここにいたか！」

タマ「にやー」

ナギ「うむ、実はな。昨日お使いで所々抜けてる部分が合ったので、もう一度やろうと思うのだが、どうだ？」

タマ（もう一度？ 蘇る様々な思い出（ハプニング））「にや、にやー！ー！ー！！！」

ナギ「タ、タマ！？どうしたのだタマ！？そんなに嫌だったか！？」

タマ「にやー！ー！ー！！！！！！！！！！！」

ハヤテ「あはは。タマも大変ですね」

マリア「そうですね」

シラヌイ「にやおん♪」



ただ、撫でるだけ。

私が今行なっている作業は、そのように形容できるところだった。

一応、気を付けるべき部分はある。それは、畳の目に沿ってしっかりと撫でることだ。

私は今、ナギの部屋で掃除機をかけている。朝食の片付けから始まり、洗濯、風呂掃除を済ました後、部屋の掃除に取り掛かっていた。ナギ専属のメイドになってから今日に至るまで、毎日続けている仕事だ。

家事は人が生活していく上で確実になくならない仕事の一つでもある。綾崎ハヤテという有能な執事が家事の一端を担うようになってからは、多少の負担は減ったものの、それでもゼロにすることは不可能と言っても良い。さらに、その内容が単調な作業であればあるほど、気も抜けてしまう。部屋の掃除もそれに類するものだった。

同じ部屋の掃除でも、箒を扱えば意欲的に取り組めるのだろう。どこに埃を集めるのかに頭を使い、その場所へと効率的に埃を追いやるために力を調節せざるを得な

いからだ。

思考と行動を一致させるような行いは、いかに創意工夫を凝らすかによって変わってくる。だが、その創意工夫は、掃除機を扱う上で全く必要のないものであった。埃を集める必要もないのだから、まるでキャンバスを塗りつぶすかのように掃除機をかけていけばいいだけの話だ。力を調節する必要もない。埃を吸引する力はボタン一つで決まってしまうのだから、たとえキャンバスにムラができるような力加減で畳の上をなぞったとしても、掃除機をかける上では何の影響もない。

確かに掃除機は便利な代物であることに変わりない。しかし、その利便性は個人の技能を殺してしまうのだ。家事のオートメーション化は、ナギのような生活能力が欠如している人からすれば諸手を挙げて迎え入れられることであろう。それに対して家事を生業とする人からすれば、生きがいの一部が奪われてしまったと言っても過言ではないのだ。

だから私は、鼻歌交じりで掃除機をかけていた。作業中の退屈を埋めてくれるのは、やはり歌でしかない。

ある音が私の耳に飛び込んできた。軽い音でリズムが一定に刻まれており、掃除機が駆動する甲高い音と私の

鼻歌の中であつて、異音とも呼べるものだった。

その音の聞こえる回数が段々と増えてきた。音自体は変わらないのだが、誰かがメトロノームのテンポを弄つたような釈然としないものになってきた。

異音が違和感へと変わっていったことに気付いて、私は鼻歌を止めた。少しだけ鮮明になっていった異音は、クリーム色のカーテンで覆われている窓の向こう側から聞こえてきた。

その時になって私は、部屋の掃除をする時に窓を開けていないことに気付いた。箒で掃いていたならば絶対に気付いていたのだろう。

利便性によって、時に人は注意力が散漫してしまうことがある。私だけ例外、というものでもない。

予感を確信に変えるため、私は掃除機のスイッチを切る。異音が雨によるものだと気付くのに、あまり時間はかからなかった。

百聞は一見にしかず。私はカーテンを開けて外を眺めた。最初は裏付けの為に行なったことだから平静を保っていたが、視界の隅に存在している洗濯物を目にした時、雨と同じような音で血の気が引いていくのを感じた。

こんな事をしている場合ではない。掃除機を片付ける暇もなく、私はナギの部屋から居間を通り抜けて、洗濯

物を干している庭へと出て行った。

◆ 雨が本格的に降り始めてから、それほど時間は経っていなかった。雨によって洗濯物に浮かんでいるシミが斑模様だったのを見て、私は胸を撫で下ろした。

◆ だが、すぐに取り込まなければ意味がない。私は洗濯物を何着か抱え込んで、居間の縁側に置いた。

◆ こういう作業の時は、文明の利器が何の役にも立たない。だから、それを行なう人の工夫が問われることとなる。全体の量と一回で取り込める洗濯物の量から何回取り込まなければならぬかを割り出し、それに一回取り込むのに必要な時間をかけて、全ての洗濯物を取り込むのかかる時間を算出する。

◆ 私の頭の中ではじき出した結論は、「一人では時間がかかりすぎる」というものだった。ならば、人数を多く揃えるのが先決だ。

◆ 洗濯物を取り込む作業を一度中断して、私は救援を求めするために一階を走り回った。

結果で言えば、時間の無駄遣いだった。一階に人は誰もいなかった。特に、有能な執事がいなかった。そもそも、ハヤテ君がナギと一緒にバイトに行っていないければ、彼は雨が降ってきた時に私よりも早く動き出しているはずだ。

孤立無援。私は覚悟を決めることにした。せめて泥が付着しないようにと、メイド服の裾をたくし上げる。

私の服が濡れてしまう分には全然構わないのだが、このアパートに住んでいる人々の服をこれ以上濡らしてしまうのは、三千院家最強のメイドとしての名折れだ。

そうになると、一分一秒の時間が惜しくなってくる。私は庭へと向かうために廊下を駆け出した。

その矢先だった。二階に続く階段から一人の人物が現われた。私は足を踏み留めて、その人物を確認する。

「ヒナギク、さん？」

私はその人の名前を口にした。予想外だった。彼女も外へと出払っていると思ひ込んでいたのだ。

彼女は多忙の身だ。特に、白皇学院の生徒会長という立場がそうさせている。休日であろうがお構いなしに、彼女は学校へと行って生徒会の業務を果たす。私も白皇学院に在学している際は彼女と同じ立場だったから、そ

の忙しさはこのアパートの誰よりも理解しているはずだった。

その彼女が今、ここにいる。この事実、私にとって僥倖以外の何物でもなかった。

まさしく天の助けだった。雨が降ったことで洗濯物を取り込まなければならぬ状況を作り出したのも、天によるものであったが……。

私は彼女に救援を求めするために、今の状況を端的に説明しようとした。だが、彼女は私の予想を大きく裏切った。

「マリアさん、私も手伝います！」

彼女はそう言うやいなや、居間の方へと走り出した。私は慌てて彼女の後を追う。

私が居間へと入った時には、彼女は既に洗濯物を取り込んでいた。しかも、彼女が取り込んでいる量は、私の約二回分に相当した。

その彼女が、洗濯物を私に向けて放り投げてきた。私はそれを全身で受け止めた。「ありがとうございます」と、お札の言葉が自然と口を突いて出た。それを見た彼女はほんの数秒だけ顔を綻ばせたが、再び洗濯物を取り込む作業に戻った。

洗濯物を取り込む作業は一人でも多い方が良いだろう。

私も庭へと出ようとしたが、彼女に目で制された。雨足は、強まっている。いくつもの水流が彼女の顔を伝っていき、桃色の後ろ髪先端からは大きな雫が断続的に落ちていった。

感情面で見れば、私は彼女の制止を振り切って一緒に洗濯物を取り込んでいただろう。

だが、その行いは非効率的なのだ。

彼女は洗濯物を縁側に投げることで、縁側までの距離を往来する必要はない。しかも、彼女は私の倍ほどの量を一度に取り込めることができる。つまり、私が一緒に外へ出ると彼女は洗濯物を投げられないし、仮に私が彼女と代わったところで洗濯物を濡らす時間をいたずらに増やすだけなのだ。

一見して血も涙もなさそうな私の行為が、結果的には物事を円滑に進めるために必要なことだったのだ。

これが、工夫と呼べるものだろうか。私は自分の知性に問いかけた。



作業は、私が最初に算出した時間を遙かに上回って終わった。ひとえに彼女のおかげだった。その功労者をど

う遇しようか、ということに私は頭をフル回転させた。

まずは、身体がずぶ濡れであることをどうにかしなければならぬ。タオルと着替えが必要だ。その着替えも長袖の方が良いだろう。

次に、身体を温めなければならぬ。お風呂という選択肢が頭の中に浮かんだが、私はそれを却下せざるを得なかった。朝食の後片付けの後に、掃除してしまっているのだ。その状態から水を張って湧かすのは、時間がかかりすぎる。

もう少し手軽にできることとして、紅茶で身体を芯から温めてもらうという結論に辿り着いた。

私は彼女に脱衣場へ行くように言ってから、タオルと着替えを取りに行った。そして、脱衣場に行って彼女に着替えてもらい、ずぶ濡れになった彼女の服を他の洗濯物と一緒に洗濯機にかけた。

「後で紅茶を用意しますから、居間の方に来て下さいね」と彼女に言付けた後、私は紅茶を作るために台所に向かう。時間はなるべく効率的に使おうと思った。私はやかんに火にかけて後、縁側から脱衣場へと続くところで濡れている部分を雑巾で拭き取った。

十数分かけて紅茶を二つのマグカップに淹れ終わった後、私はそれらを盆に載せて居間へと入った。

彼女はちやぶ台の奥側に座って、その場所から外を眺めている。私が渡した長袖のパジャマに袖を通し、念入りに髪を拭いていた。

私も外を見た。雨足は衰えており、止むのは時間の問題だった。洗濯が終わる頃に天気は回復しているだろう。ひんやりとした空気が居間へと流れ込んでいるのを感じる。短時間で強い雨が降った後は、寒気が流れ込んで気温が下がる。

くしゅん、と、くしやみをする音が聞こえた。その音は、私の心を締め付けた。本来ならば、私はずぶ濡れになつていたので。それを彼女が代わりに濡れてくれた。だからあのくしやみは、私がするはずのものなのだ。

「この調子だと、もう少して止みそうですね」

テーブルに盆を置いて、マグカップを一つ彼女に手渡した。それを受け取った彼女は、まじまじと立ち上る湯気に見入っている。

私は彼女と相對するように座り、残り一つのマグカップを自分の傍に引き寄せた。

「本当に助かりましたわ。急に雨に降られたのですから」

改めて私は、お礼の言葉を口にした。この一言には、洗濯物を取り込んでくれたことも含まれているが、それ

よりも、私の代わりに濡れてくれたことに対する気持ちの方が強かった。

「いえ、こちらこそ。毎日洗濯してもらって本当にありがとうございます」

「それが仕事ですから。家事というのは、人数が少し増えても仕事量はあまり変わりませんのよ」

まさか、彼女からお礼を言われるとは思ってもよらなかったから、私はあまり素直ではないことを言ってしまった。

前の屋敷で暮らしている時は、家事をしていても礼を言われることがあまりなかった。

私はメイドで、家事をすることが自分の仕事だと割り切っていた。一緒にいたナギも素直に礼を言う人間ではなかったから、家事をして礼を言われることが新鮮に感じられた。

締め付けられていた私の心は、いつの間にか緩んでいた。きつと、表情にも表れていたのかもしれない。

「まるで、このアパートのお母さんみたいですね」

だが、彼女の失言が私の表情を引き締めることになる。彼女はすぐに口を閉じたが、遅かった。もう私の耳に届いてしまっていた。

私は彼女を凝視する。彼女は僅かに首を左右に振って

いた。黄色い瞳が、「悪気はないんです」と訴えかけてきているような気がした。

なぜか付き合いが長い人ほど、私の雰囲気勘違いしてしまうものだ。

「あなたも、ハヤテ君と同じことを言うんですね。——私はまだ、十七歳ですからね。まだまだ「お姉さん」ですから」

一度溜息を吐いた後、頬を膨らませた。そして彼女から視線を逸らし、顎を突き出すようにして顔を彼女から背けた。彼女のような常識人でさえ、このような勘違いを起こしてしまう。このままここでの生活が進めば、いずれ住人全員から「お母さん」呼ばわりされる恐れがある。それだけは、何としても避けたかった。

反応を伺おうと、横目で彼女を捉える。彼女は瞳をぐるぐる回し、全力で物事を考えている様子だった。ドギマギしている彼女は、いつもの彼女らしくないなとも思った。今の私の表情は、それだけ凄んでいるのだろうか。

「そういうえば、どうしてナギはバイトをしているのですか？」

閉塞感で取り巻く今の状況において、彼女は何か突破口を見出すことに成功したようだ。私は一度仕切り直す意味を含めて、咳払いしてから彼女の方へ向き直った。

紅茶に一口つける。彼女もそれに倣って一口飲んだ。彼女が心のゆとりを取り戻すには、少々時間がかかりそうだ。

「ハヤテ君への誕生日プレゼントのためですよ。ナギは、自分が稼いだお金で彼に腕時計をプレゼントするつもりですわ」

「自分で稼いだお金ですか……。ナギも変わりましたね」  
視線を自分のマグカップに落とした彼女は、頬を緩ませてにこやかな笑みを浮かべた。

彼女も、ナギの為に心を砕いてくれている一人だ。ナギが良い方向へと変わっていくことを彼女も喜んでくれたのだろう。

私も嬉しかった。遺産の相続権を失う前、ナギが莫大なお金に護られている時に自分から言い出したからだ。

今までのナギから考えれば無謀に見える挑戦も、私は応援したいと思った。

「確かに、ハヤテ君が来てからナギは変わりました。自分から何かをするようになったのも、ハヤテ君がナギの執事になってからです」

一度テーブルを見つめる。微かに映った自分の顔を笑顔で再構成してから、私は外を眺めた。外は少しづつ明るみを取り戻していた。黒ずんでいた雨雲も、まるで洗

濯されたかのように少しずつ、白色の雲に変わっている。

十三歳で白皇学院を卒業してから、私はナギの専属のメイドとして彼女と生活を共にしている。

その中で様々なことがあった。両親を既に失い、世の中を斜めに見ることしかできなかった彼女を、私は支え続けた。

学校に行く年数を少しでも減らそうと、飛び級制度を彼女に勧めた時もあった。私自身は両親の愛というものを知らなかったが、それでもナギの両親の代わりになるうとした。

だが、彼女を支えることはできても、彼女を導くことはできなかつた。

「羨ましいですよね。私も私なりにナギの為に頑張っているのですが、ハヤテ君の影響力には敵いそうにありませんわね……。異性だからでしょうか？」

嫉妬にも聞こえるような独語は、僻みから来るものはなかつた。

ハヤテ君とナギと私は、一つの家族のようなものだから。ただ、役割が違うのだと自分に言い聞かせた。

——執事は主に仕え、メイドは主のいる屋敷に仕える。どこかから、笑いを嘔み殺したような声が聞こえる。

視線を空から居間へと戻すと、彼女が口元を手で隠しな

がら笑っていた。

「何かおかしな事でもあったのだろうか」と首を傾げてみせると、彼女の笑いはより大きくなっていく。

いてもたってもいられなくなり、私は彼女に尋ねた。

「何か、おかしい所でも？」

「いえ、言っていることがお母さんだなんて思ってしまったまして……」

「もう！」

私は抗議の声を挙げた。だが、一言発しただけでその後は目を伏せてしまった。

「どうやら、天気も回復したみたいですね」

縁側へと出て行った彼女の後ろを付いていく。雨はすっかり上がっていた。遙か先を見渡せば、雲の隙間から差し込む光によって明るく照らされている所もあった。

これ以降に雨が降ることはないだろう。私は大きく伸びをして気持ちをリフレッシュさせる。

「それでは、洗濯物でも干し直しますか」

「私も、お手伝いします」

「はい。よろしく願います」

私は洗濯物を取りに行くために、脱衣場へと向かっていった。

ここの住人にとって、そしてナギにとっての日常を支

えることが、私の役割であることに変わりはないからだ。

それがメイドの存在意義なんだと、私は自分自身に言い聞かせた。



# 私は王女、あなたは執事

著者…みつちよ

## 第一話「王女の想い」

むかしむかし世界は大きな4つの国に分かれていました。ハート、スピード、ダイヤ、クローバー  
どの国も気候や特色を生かし栄えており国々が良好な関係を築いてきました。

これから話す物語は美しい一国の王女とその執事の甘く切ない恋物語です。

商工業が盛んでにぎやかな国、ハート国

その都市の中心には大きく立派な城が建っている。  
美しい花々に囲まれた城にはその花たちも見劣ってしま  
うくらい美しい姫がいた。

彼女の名前は・・・

「王女！ヒナギク王女！どこにおられるのですか！」

青髪の少年が王女の名前を呼びながら城内を走り回って  
いた。

先程は出遅れたが少年が叫んでいた通り彼女の名前はヒナギク

「ハヤテ！ここよ、ここ！」

少年ハヤテは声をしたほうを振り向くとたくさんある部屋のいちばん隅の部屋からきれいな手が手招きしているのが見えた。

「王女。こちらにいらしたのですね！」

ハヤテは部屋へ駆け寄りドアを開こうとした。

その瞬間さっきまで手招きしていた手がいきなりハヤテを部屋へ引き込んだ。

咄嗟のことに対応できずハヤテはバランスを崩して顔面から部屋の中にダイブした。

「あ、いたたた・・・」

「ご、ごめんなさい。」

ハヤテを起こそうと手を差し出すヒナギク。

「大丈夫です。それに王女のお手を借りるなど僕にはも  
つたいないですよ。」

ハヤテはすぐに立ち上がり笑顔を見せた。

その言葉に王女が一瞬さびしそうな表情をしたのは・・・  
気のせいだろう。

「そんなことより早く明日の衣装を決めてください。」

明日は王女の婚約者を決める大事なパーティーなので

すから。

「マリアさんたちも王女のことを探してましたよ？」

「・・・そうね。すぐに行くわ。」

悪いけどマリアさんたちに私の居場所をしらせてきてくれる？

きっと心配してるでしょうから。

あと衣装合わせはこの部屋でしたいことも伝えといてもらえるかしら。」

「わかりました。すぐ伝えてきます！」

ハヤテは部屋の前で一礼すると走ってマリアたちのもとへ向かった。

遠ざかっていく足音を聞きながらヒナギクは窓の外を向いてため息をついた。

なぜこんなにも落ち込んでいるのか。

それはヒナギクの心の中にある想いが原因

ヒナギクはハヤテのことが好きだ。

それは家族や友達と違う。異性としての好き。

小さいときからずっとそばにいていつどんな時も守ってくれた。

いつからこんなに彼にひかれていたのか

彼のいることが当たり前になりすぎてそれすらわからな

い。

本心を言えば婚約者を決めるパーティーなど絶対に行きたくない。

かなうならハヤテと結ばれたい。

しかし自分は一国の王女である。

自分の気持より祖国と国民を大事にしなければならない。そのためには有力な権力者との婚約は免れないのである。

「ハヤテ・・・」

あなたはそれでいいの？

私が違う人と結婚してもあなたは笑っていられるの？

伝えたい言葉が雫となって頬を伝い赤いカーペットにしみを作る。

窓の外は曇っていて王女の気持ちを代弁しているようだった

第二話 「王女と呼ばれる少女」

翌日、ヒナギクの婚約者を決めるパーティーが行われた。婚約者を決めると言っても王女自身が決めるのではなく王や王妃が決めるために開かれるためヒナギクは、最初の顔合わせの挨拶をするくらい。

王女の婚約者というだけあって各国の権力者から有力な貴族、中には王族も混じっている。

ヒナギクがあたりを見回すと錚々たる顔触れの中に見覚えのある顔を見つけた。

「お姉ちゃん！」

「ヒナ！」

そう、見つけたのはヒナギクの姉、雪路の姿。

そしてその隣にもう一人・・・

「お義兄さんも来てたんですね。」

雪路の夫でスピード国の王子である京ノ介だった。

ハート国とスピード国は極めて良好な関係を築いてきた。

その背景には政略結婚が大きく関わっている。

二人もまた許嫁同士だった。

しかし二人は好きあって結婚したのだ。

楽しそうに笑っている二人・・・  
姉は好きな人とずっと同じ道を歩んでいける。

私は・・・

昨日流し尽くしていた涙がまた溢れてきた。

雪路に泣き顔を見られたくなかった。

だから・・・

「お姉ちゃん！ごめんなさい。すこしつかれたみたいだから一度部屋に戻るね。」

「え、ちよつ、ちよつとヒナ??？」

雪路の言葉を聞く前にヒナギクは逃げるように会場の外に出た。

惨めだった。

王女という名に縛られ、自由を奪われ、愛する人さえ決められてしまう。

寂しくて、切なくて、苦しくて・・・

「王女」

聞きなれた声私を呼ぶ。

「王女」

(いや)

### 第三話「本当の想い」

「王女！」

(いや！)

「王女、ここにいらしたのですね」

「……………ないで。」

「えっ？」

「その名前で私を呼ばないで！！」

もう涙を隠す余裕なんてなかった。

ヒナギクは自室に駆け込むと声を殺して泣いた。

ハヤテはその場に立ち尽くすことしかできなかった。

時同じくしてパーティー会場

二人の男女が隅で声を殺して話している。

「あの王女のお付きの執事。似てるわね…………」

「でも、あの子はもう…………」

「そんなの調べてみないとわからないじゃない！！」

「しっ！声が大きいよ。」

「ご、ごめんなさい。でも…………」

「君が言う通り少しでも望みがあるのなら。調べてみよう。」

パーティーが行われた翌日

ヒナギクは王と王妃が自分のことを呼んでいるとメイドから聞き、

長い廊下をひたすら歩いていった。

その少し後ろからついてくるハヤテは昨日のことがあつてか少し浮かない表情。

みなさんも知つての通りハヤテは鈍い。

なので昨日のヒナギクの言葉の意味が全く分からず

「王女を不快にさせてしまった」

という罪悪感でいっぱいだった。

とりあえず謝らなければ…………

ハヤテは目の前を歩いている少女に意を決して話しかけた。

「あ、あの、お…………」

しかし問題発生

「王女」と呼ぼうとしたが昨日呼ぶなど言われた以上なんて呼べばいいかわからない。

しどろもどろになっているハヤテにヒナギクは振り向い

て・・・

「ごめんなさい。」

「えっ??」

自分が謝ろうとしたのにいきなりその当事者に謝られてハヤテは面をくらってしまった。

数秒の間があり我に返ったハヤテは・・・

「謝らないでください!!悪いのは僕なんですから!」

「いいえ、ハヤテは悪くないわ。」

悪いのは私だから。あれは、私のわがまま。

だから気にしないで。今まで通り普通に接してくれる?」

「・・・はい。王女がお望みなのでしたらそのようになります。」

「ありがとう。」

王女は笑った。

とても美しく・・・儂かった。

ヒナギクが大広間につくと王と王妃が駆け寄ってきたため

ハヤテはすぐに後ろへ下がりが広間の端へ向かった。

「ヒナギク!!喜んでくれ!お前の相手は大物だぞ!

あのスピード国の王子、康太郎王子だ!」

「よかったわね!これで祖国も安泰よ!」

「・・・」

ヒナギクは無言だった。

何と言えbaikわからない。

喜べと言われても本心から喜べない以上何も言えなかった。

嘘でも「うれしい」と言うべきなのかもしれない。

でも嘘はつきたくなかった。

だから無言。

「どうしたんだい?ヒナギク?」

黙っている自分を心配そうに見つめている両親。

「なんでもありません。」

「そうかい?それならいいけど・・・」

何かあるならちゃんというんだよ?」

両親に心配はかけたくない。

でも・・・やっぱり喜べなかった。

「明後日、顔合わせがあつてその次の日には挙式を挙げるから

今日はゆっくり休んどいた方がいいわ。」

ヒナギクの母は優しく話しかけヒナギクを部屋へと連れていくようハヤテに申しつけた。

部屋へと戻るヒナギクはまた無言だった。

ハヤテはヒナギクの手を引いて部屋まで連れて行った。

「それでは、失礼します。」

ヒナギクを部屋まで送るとハヤテは一礼して部屋を出ようとした

「まって!!!」

がヒナギクによって引き止められた。

「なんですか?」

不思議そうな顔でヒナギクを見つめるハヤテ

「あ、あのね。えっと・・・」

「?」

「だから、えっと、さ、散歩がしたいの!付き合ってくれる?」

「え、いいですけど・・・」

急にどうされたのですか?」

「な、なんとなくよ。なんとなく!!!」

少し強い口調で言うヒナギクにたじろぐハヤテ

「わ、わかりました。では参りましたようか。」

ヒナギクはうなずくと手を差し出す。

ハヤテはその手を優しく握って庭園に案内した。

美しい花々が咲き乱れて小鳥たちが歌っている。

大きい花、小さい花、鮮やかな色をした花、おとなしい色をした花。

そのどれもが輝いている。

短い命を精一杯つかって美しく咲こうとしている。

「きれい・・・」

そんな言葉が自然と出た。

そして同時に自分はちっぽけだ、と思った。

自分の想い一つも打ち明けられない。

ずっと我慢してきた。

「ねえ、ハヤテ。」

ずっとずーと言いたかった言葉。

大好きなあなたへ。

「なんですか?」

私の最後のわがままだと思って許してね。

あなたにこの思いを伝えることを・・・

「好き。」

第四話 「執事の想い」

「好き。ハヤテのことが大好き。」

花たちが美しく香る庭で打ち明けられた想い。

甘いおいを風があたりへまき散らす。

王女はこの甘いにおいに惑わされておかしくなったのだろうか。

王女が僕のことを好き、なんて・・・

「ははは・・・、冗談はやめてください。」

「冗談なんかでこんなこと言うと思う？」

「・・・」

「私、結婚するの。顔も知らない男の人と・・・」

「・・・王女は、この婚約を望まないというのですか？」

「本音はね。でも王女だもの。この国を守ることが私に課せられた義務よ。」

もし私がこの婚約を破棄したらどうなると思う？

相手の国が戦争を仕掛けてくるかもしれない、貿易を拒んでくるかもしれない。

私ひとりの身勝手な判断でこの国の人が苦しむのは見たくない。

この国が大好きだから。私は結婚するの。」

振り返った王女は泣いていた。

泣きながら・・・笑っていた。

「でも、好きな人に想いを伝えられないままなのはどうしてもいや。」

このまま結婚してもきつと杭が残る。だからもう一度だけ言うね。

私はハヤテのことが好きです。誰と結婚してもこの気持ちには変わらない。

だからハヤテも正直に答えて。王女としてじゃなく一人の女として。」

「僕は・・・」

王女のことをどう思っているんだろう？

王女といると楽しくて。

王女が泣いてる自分まで泣きたくなる。

王女が笑つてると僕も自然と笑みがこぼれてくる。

王女が誰かと、けっこん・・・

「・・・だ」

「え？」

「そんなの絶対に嫌だ!!!!!!」

感情が抑えきれなかった。

「僕は、王女、いえヒナギクのことが大好きだ!!」

他の誰かと結婚なんてしないでください!!

僕は、ぼくは・・・」

情けないと思う。

好きだと言いながら泣き崩れるなんて・・・

でもどうしようもなかった。

僕は執事で、あなたは王女なのだから・・・

## 第五話 「恋人ごっこ」

一日だけでもいい。あなたと一緒にいたい・・・

「ハヤテ、落ち着いた？」

「・・・はい。すみません・・・。とり乱してしまって・・・」

「いいわよ。そんなことで謝らなくても。それに・・・」

「それに？」

「ハヤテが私のことどう思ってるのかも聞けたしね！」

ヒナギクはうれしそうに笑った。

ハヤテも照れながらも笑顔だった。

「あの、おうz・・・」

じよ、という前に不意に口をふさがれた。

初めてのキス

甘くて、せつなくて、唇から体全体に電流が流れるよう

な

そんなキスだった。

唇を重ねていた時間はほんの少しだったのに永遠のように感じられた。

「ヒナギクって、呼んで・・・」

「え!？」



「お願い！結婚式まで残された時間はたった一日しかないの！お願い！私と・・私と付き合ってください！！」  
数秒の沈黙

「・・・はい。よろしくお願いします」  
「ありがとう。ハヤテ」

たった一日の恋人関係

それははたから見たら遊びにしか見えないと思う。

王家の少女と使用人の少年の恋愛ごっこ。

決して結ばれることのない男女の悲しいおままごと。

それでも彼らは真剣だった。

第六話 「最初で最後の日々思い出の場所」

「ハヤテー！早く早く！！」

「まっ、待ってください！」

「今日一日しかないんだから急がないと日が暮れちゃうわよ！！」

ここは城からほど遠くない、ハート国の中でもっとも大きい都市

その町の中心部に二人はいた。

なぜ、二人がこの場所にいるのか。

それは昨日の夜までさかのぼる・・・

ヒナギクとハヤテは明日のことについて話し合っていたとき

ヒナギクが「ハヤテと街に出かけたい」と言ったのが始まり。

結婚すれば自分はこの国ではなく別の国で暮らすことになる。

だから最後にハヤテとこの国を見て周りたい。と、ハヤテもその意見には賛成・・・というかヒナギクと一緒にいられば場所はなんてどこでもよかった。

王も王妃も街に出かけたい理由（ハヤテとのことは伏せて）を話すと

「それはいい、今日は楽しんでおいで」と承諾してくれて今に至る・・・

「王・・・じゃなかった。ヒナギク！そんなに走ったら危ないですよ！！」

「大丈夫だいじよ、キャッ」

ヒナギクは足を滑らせて転びそうになった。

「だから言ったじゃないですか、『危ない』って」

ハヤテはすごい勢いで走って来てその体をしっかりと支える。

「あ、ありがとう・・・」

ヒナギクは顔を真っ赤にしたままお札を言った。

「いえ、ヒナギクにケガがなくてよかったです。」

ハヤテは笑顔で答えた。

「さて、はどこから見て周りますか？」

「そうね・・・あのお店とか新しく出来たみたいだし行ってみたいわ」

「では、行ってみましょうか」

ハヤテはヒナギクの手をしっかりと握って店に向かって歩き出した。

ヒナギクは再度真っ赤。

それから二人はいろいろなものを見て周った。

洋服や小物、小さな公園や劇場もみたり一日休みなしで遊び尽くした。

楽しければ楽しいほど時間は早くに過ぎていき、気がつくとも空は紅に染まっていた。

そろそろ帰らなければいけない時刻・・・

それはこの関係が終わってしまう最後の時だった。

二人は、口数の少ないまま城に向かう小道を歩いているとハヤテが何かを決心したように顔をヒナギクの方へ向けた。

「ヒナギク、すこし寄り道していてもいいですか？」

ハヤテの言葉に少し驚いたが一秒でも長くハヤテと一緒にいたいという想いがあったヒナギクに断る理由はな

った。

ハヤテは小道からそれでどんどん進んでいく。

ヒナギクも黙ってハヤテの後ろをついていく。そして、

「つきましたよ。」

そこは城のすぐ下にある小さな丘だった。昔、幼い日の

「ハヤテ・・・どうしてここに？」

「ここは僕たちの思い出の場所ですから・・・」

少年と少女が出会った場所。

今から十年前のあの日・・・

第七話 「最初で最後の日〜十年前の出会い〜」

十年前のあの日、僕らは出会った

「ヒナギク王女がまたいなくなったー！！！！」

場内に響き渡る悲鳴めいた声を尻目に一人の女の子が城の周りを取り囲む城壁を降りながら笑っていた。

「あはは、まだまだ甘いわよ。クラウス」

この女の子こそ先程場内で騒ぎが起こる原因となった張本人、

ハート国の王女、ヒナギク（六歳）である。

六歳といえばまだまだ遊びたい年頃

しかし王女ともなれば覚えることは山ほどある。

遊んでる暇などない。

なので時々使用人たちの目を盗んでこっそりお城から逃げるのが彼女にとっては遊びなのだ。

一方、使用人たちは気が気じゃない。

王女に何かあれば自分たちの処遇だけじゃなく国全体に関わる。

城の中が騒がしくなって「王女ー！」という声があちらこちらで聞こえる。

さすがにここにはせつかく抜けてきた苦労が水の泡急いでこの城壁を降りなければ！

ヒナギクは足元を探りながらさっきよりもスピードを上げて降りはじめた。

しかし焦ってしまったせいか足は壁の石を空振りし宙に浮いた。

そして

「キヤアアアアアアアア！！！！」

ヒナギクはそのまま真逆さま！

このまま落ちていけば地面との正面衝突は免れない。

ヒナギクがあきらめかけて目をつぶった、その時である。どこからか風が吹いたかと思うと地面にぶつかった時に

体中を走るであろう痛みがいつまでもたっても来ないのである。

恐る恐る目をあけると・・・

「大丈夫？」

優しいような男の子がこちらを心配そうに覗きこんでいた。

「助けてくれて本当にありがとう！私、ヒナギクって名前なの。あなたは？」

「僕はハヤテ」

「よろしくね！ハヤテ君」

「こちらこそよろしく、ヒナギクちゃん！でもあんな危

ない場所にどうしていたの？」

「えっと、それは、お城から逃げるため・・・かな」

「お城って！まさかヒナギクちゃんのお城に住んでるの？」

「うん！」

「すごいな」

「ハヤテ君はどこに住んでるの？」

「僕はそこの孤児院に住んでるんだよ。」

「そう、なんだ・・・」

ヒナギクは「孤児院」と聞いてすこし顔を曇らせた。

幼いヒナギクにもそこがどんな子供が住んでいるか分かっていただけからだ。

そんなヒナギクの様子にあわてたハヤテは必死に弁解した。

「で、でもお兄ちゃんやお姉ちゃんや妹や弟がいるから毎日とっても楽しいよ！」

「・・・私もお姉ちゃんが一人いるんだよ！でももうお嫁に行っちゃっていいからつまらないの。」

「そっか・・・」

「見つけましたよー！！！！」

「！.....」

二人とも同時に振り返ったその先には・・・

「クラウド！」

汗だくで息も荒い男性が睨みつけるような視線で二人を見ていた。

「まったく、あなたたつて人は・・・さあ帰りますよ！」

「待ってよ！！まだ、ハヤテ君とお話したい！！」

「わがまま言わないでください！それに誰なんですかこの少年は？」

「誰って私の友達よ！」

「少年、どのだれかは知らないが、ここにいるお方は次期王位継承者だ。」

「！！」

ハヤテは驚いた顔でヒナギクの方を向いた。

「別に今そんなことどうだっていいでしょ！」

「大事なことですよ！！」

「今は重要じゃないでしょって言うてるの！」

「どこの誰ともわからない相手と会話するのはおやめください！」

「彼は私の命の恩人よ！」

「！！！！！！」

クラウドは驚きのあまり言葉を失った。

数秒後

「それは本当ですか？」

「ええ、城壁から落ちたところを助けてもらったの」  
王女の命を救ったと聞いては下手に手出しできない。

「これで彼と話す時間をくれるわよね？」

しかしここで引き下がるわけにもいかない。

「待ってください。それではこの少年には王家のものを助けたものとして恩義があります。」

恩義は王家の者として返さなくてはなりません。

「どうでしょう、彼を王とお妃に逢わせてみてはいかがでしょうか。」

「お父様たちに？」

「そうです。彼にとつても悪い話ではないでしょうか？」

「え……あの……」

いきなり自分に話題を振られて戸惑うハヤテ

「ハヤテ君はどうしたい？」

「あ……だからえっと……別に大したことしたわけじゃないし、ヒナギクちゃんが無事なら僕はそれで……」

「でも私もお礼はしたいと思ってたから。できればさせてほしいんだけど……」

「……ヒナギクちゃんが言うなら……」

「それでは城までご案内します」

クラウスを先頭にハヤテとヒナギクは手をつないでお城へ向かった。

第八話 「最初で最後の日々十年前の決断」

「……すごい」

城内へ入るとあまりの美しさにハヤテは感嘆の声をあげた。

大きなホールや部屋がいくつもありすべてが輝いて見えた。

ヒナギクも目を輝かせて城内を見回すハヤテを嬉しそうに見ていた。

「さあ、つきました」

そこはひととき目立つ大きなドアの部屋だった。

どこか威圧感をまとったその部屋のドアが静かに開いて、中にいる使用人たちがハヤテ達を招き入れた。

そこには一人の女性が椅子に座ってこちらを見ていた。

「ヒナギク、と可愛いナイトさんがいるようね」

よく通るソプラノの優しい声

「この者が先程ご報告した王女の命を救った者です」

「名前はなんていうの？」

「ハヤテです……」

「”ハヤテ” 良い名前ですね。このたびは娘の命を救っていただきありがとうございます。」

「い、いえ、当たり前のことをしただけなので……」  
いきなり頭を下げられ戸惑うハヤテ。

そんなハヤテに助け船を出したのはヒナギクだった。

「お母様。ハヤテ君に何かお礼をしたいのですが……」

「そうですね。何か欲しいものなどありますか？」

「え、えっと……」

「なんでもいいんだよ？」

ヒナギクは笑顔でハヤテの答えを待った。

「……それじゃあ、僕が住んでいる孤児院の人数が多くなちゃって、ものがいろいろ不足してるから服とか家具とかがもう少しあったらいいかなって……」

「そうですね……わかりました。国の人に使わなくなった家具を譲渡してもらえるようにお願いしてみます。」

それが孤児院への寄付金を倍にします。」

「ありがとうございます」

「お母様。私からも一つお願いがあります。」

「なんですか？」

「勉強も真剣に取り組みます。もう逃げ出したりもしません。」

だから、たまにはハヤテ君と遊ぶことも許可していただけますか？」

「王女！彼は恩人とは言え平民ですぞ！王女の遊び相手

なら貴族の子弟「わかりました」

「あなたも遊びたい年頃なのにいろいろしてあげられなかったことが今回あなたを危険な目にあわせた原因だと私は考えています。そのくらいは認めましょう。」

「ありがとうございます」

「しかし、クラウスの行っていた言葉にも一理あります。だから彼には遊び相手ではなく執事になってもらうのはどうでしょう?」

「執事?」

「そうです。執事になれば身の回りの世話をしたりするので勉強で忙しいときなども時間を無駄にすることなく遊べますよ?」

「でも・・・」

執事という仕事は朝起きてから夜寝るまで主と一緒に世話をします。

それは、ハヤテの今の生活が壊れてしまうことを意味していた。

「もちろん彼の考えもあるでしょうから強制ではありません。一つの案としてただけです。今日はここに泊って行きなさい。ひと晩じっくり考えてから明日の朝、返事を聞かせてください。クラウス、部屋へ案内してあげて。」

「かしこまりました」

ハヤテは案内された部屋のベッドに腰掛けてずっと考えていた。

ヒナギクともっとお話ししたい。

彼女ともっと遊びたい。

彼女のことをもっと知りたい。

でも、それは今の暮らし、家族と別れることになってしまふ。

コンコン

ノックの音がしてドアの方を見るとヒナギクが立っていた。

「ハヤテ君」

「ヒナギクちゃん」

「ごめんね、こんなことになっちゃって・・・」

「・・・」

「あのね、ハヤテ君の好きな方を選んでいいから」

「えっ?」

「私のことなんて気にしないで、ハヤテ君は自分の心に嘘はつかないで、自分のやりたいようにすればいいから。」

「ヒナギクちゃん」



「それじゃあ、お休み」

ヒナギクはそういうや否やドアを閉めることも忘れて駆けだしていった。

「自分の心に正直に……。わかったよ、ありがとう、ヒナギクちゃん」

第九話 「最初で最後の日」十年前の追憶」

「あのときこの場所で僕があなたに出会わなければ今のこの幸せは絶対に手に入らなかった。」

そう、僕があの日、あの時間、この場所を通っていないければ、

ヒナギクがあの日、あの時間に城内を抜け出していなければ、

今の関係はおろか存在すら知らずに生きていただろう。

「だから、この場所に連れてきたかったです。あなたと出会い、歩み始めたこの場所に……」

「ハヤテ……」

ヒナギクは涙が止まらなかった。

「悔しい……最後は笑顔で別れようと思ったのに……」

涙は頬を伝って地面へと落ちていく。

「ヒナギク……」

ハヤテは優しくヒナギクを抱きしめた。

「ハヤテ……」

ヒナギクもハヤテの背中に手をまわして必死に抱きついた。

離れたくない。

ずっとこうしていたい。

ずっと……

しかし時間は有限で残酷だ。

どんなに強く願っても止めることはできない。

「ヒナギク……」

ふいにハヤテの体がヒナギクから離れた。

「ヒナギク、結婚式をしよう！」



第十話 「最初で最後の日」二人だけの結婚式」

「ヒナギク、僕と結婚式を挙げてください」  
「えっ？」

ハヤテの言ってる意味が全く理解できなかった。

「結婚式？」

「そうです。きれいな衣装や教会があるわけでも、認めてくれる家族がいるわけでもありません。でも、僕たち二人がこの結婚を認めるんです。戸籍上は無理でも心はこれから先ずっとあなたと共に歩んでいきます。ですから……」

ハヤテはヒナギクの前でひざまずいて……

「僕と結婚していただけませんか？」

ハヤテの手にはいつの間にか指輪の箱が乗っていた。

「……はい。」

ヒナギクは目尻に涙を浮かべながらも笑顔で答えた。

「手を出してもらっていいですか？」

ヒナギクが手を差し出すと、手の甲に短いキスをして指輪をはめた。

「ハヤテ、今度は私が……」

「はい。」

ヒナギクはハヤテから指輪を受け取るとハヤテの手をとって指輪をはめた。

「愛します」

「私も……」

あいしてる

たった五文字の言葉にどれだけの意味があったのだろう。言葉は目に見えなくて、すぐに消えてしまう。

「ねえ」

「わかってますよ。」

誓いのキス

甘くてとろけそう

どれくらい唇を重ねていただろう

数秒、数分、数時間

どれだけ重ねてもほんの一瞬のように感じてしまう。

「これで私たち離れないよね？」

「はい、ずっと一緒です。」

ハヤテは、笑いながら……泣いていた。

「ハヤテ……」

「あれ？なんでぼく泣いてるんだろう。おかしいですね……結婚式挙げた直後に泣くなんて。」

ハヤテは一生懸命袖で涙をぬぐうがあとからあとから溢れてきて止まらない。

「気にしないでください。きっと目にゴミでも「我慢しないで」

ハヤテの言葉を遮ってヒナギクは言葉をつづけた。

「我慢なんてしなくていいわ。泣きたいときは思いっきり泣いて。」

その言葉にハヤテは何かの糸が切れたように大声をあげて泣いた。

ヒナギクは黙ってハヤテを抱きしめた。

「ヒナギク、ヒナギク・・・」

ヒナギクの名前を何度も何度も呼びながらハヤテも抱きしめ返した。

本当はずっと一緒にいたかった

この先も君の笑顔を見たいかった。

自分がこの手で・・・君を幸せにしたかった。

「ハヤテ・・・」

「ヒナギク・・・」

最後のキスは涙の味がした。

## 第十一話「ピリオド」

ヒナギクはベッドの上で目を覚ました。

隣の彼はまだ夢の中のようなだ。

あの結婚式の後どうやって帰ってきたかは覚えてないが二人とも泣き疲れて眠ってしまったらしい。

「ハヤテ・・・」

この名前を近くで呼べるのも今日が最後

今日は王子との顔合わせがある

そして明日は結婚式

この国と離れなければならない

「はあ・・・」

ヒナギクは小さくため息をついた。

「ため息をついたら幸せが逃げてしまいますよ？」

その声に驚いて顔を向けるとハヤテが苦笑しながら体を起こした。

「ハヤテ！起きてたの!？」

「はい、名前を呼ばれたので」

ハヤテは笑顔で答えた。

「幸せ・・・か」

ヒナギクは対照的に悲しそうな顔

「私の幸せはハヤテがいてくれるだけでいいのに……」  
「……大丈夫ですよ。僕はどんなに離れてもヒナギクのことを愛してます」

「そうね、結婚式までしたんだから！」

ヒナギクは自分の左手の薬指にはまっている指輪を見て笑顔になった。

「さて、そろそろマリアさんたちが起こしに来る時間なので僕は着替えて自室に戻ります」

「え……」

「ここに僕がいたらまずいでしょう？」

「……」

まだ一緒にいて！

そんな言葉が喉の奥まで出かけるが必死に抑え込んで、

「そ……うね」

これが精一杯だった。

「それでは、失礼しました。王女」

ばたん、と扉が閉まる

「ハヤテ……」

王女、と呼ばれることがこんなに苦しいと思ったのは初めてだ。

この前は気持ちを確かめる前だったからかもしれないが、気持ちを知ってしまった今、

その名前で呼ばれることが苦しい顔合わせまであと数時間。

ハヤテとの恋人ごっこは終わった。

次は顔も知らない相手との結婚ごっこ

たった一日とこれから先の一生

周りから見ればどちらが重要かなんてたかが知れている

でもヒナギクにとってはたった一日でも「ハヤテ」とい

う少年との時間が大切だった。

あと数時間でこの気持ちにピリオドを打たなければなら

ない。

「無理よね……」

ヒナギクの声はマリアたちが勢いよく開いたドアの音に

かき消されて消えていった。

第十二話 「ペンダント」

「王女ー！！」

マリア達が大慌てで部屋に入ってきた。

「どうしたの！？そんなにあわてて！」

ヒナギクは目を丸くしてマリアたちの方に顔を向けた。

「どうしたもこうしたもありませんわ！」

王女！！今すぐ支度なさってください！」

「どうして？顔合わせはお昼のはずよ？」

「それが、予定が少しずれたそうであと一時間もしない間にこちらに着くそうなんです！」

ヒナギクは絶句した。

心の整理がつかないまま顔合わせなんて無理にきまつて  
る。

数時間あつてもつかないものをあと一時間足らずで決め  
なくてはならない。

「とにかく急いで着替えてください！！」

ヒナギクは目の前に突き付けられた現実を受け入れられ  
ず放心状態

その間にマリアたちはてきぱきとヒナギクの着替えを済  
ませていく

しかしマリアがヒナギクの左手に白い手袋をかぶせよう  
とした時、今まで動いていた手が止まった。

「あの・・・王女？これは・・・」

そう、マリアが見たものは左手の薬指にはめてある指輪

「え？」

ヒナギクがその声に反応して自分の左手を見ると同時に

「しまった」と思った。

「あの、これは・・・」

「え、えっと・・・これは、その・・・お、おまじない  
なの！」

「おまじない？」

「ええ、結婚する前に自分で一度この指に指輪をはめると  
結婚してからもずっと幸せ出られるらしいの！」

ヒナギクはそう言いながら指輪をはずしてテーブルの上  
にそっと置いた。

「そうなんですか・・・」

マリアは不思議そうな顔をしたが特に深く質問せず、か  
ぶせかけだった手袋をはめた。

「それでは、王子がお見えになるころにお呼びしますの  
でそれまではこちらで待機してください。」

マリアたちは一礼して部屋の外に行行った。

「はー」

ヒナギクは安堵のため息を漏らした。

「危なかったわ。さすがにこの指にはめてるのはまずいわよね・・・」

ヒナギクはすこし考えて指輪をペンダントにすることにした。

引き出しから昔つけていたペンダントを見つけてきてそれをバラバラにして糸だけを残した。

そして指輪を通しもう一度結びなおす。

首にかけてみると服の下にすっぽりと隠れて見えない。

「よし」

ヒナギクが首にかかるペンダントを見つめると・・・  
コンコンッ

「王女！王子がお着きになりました」  
ついにその時が来てしまったのだ。

### 第十三話「真実」

ヒナギクが大広間につくとそこはあの日の舞踏会以上に豪華な造りになっていた。

城じゅうの使用人達が全員集まっていたきれいに端に並んでいる。

ヒナギクの眼は無意識にハヤテを探していた。

『いた！』

ハヤテはドアのいちばん近い所に無表情のまま立っていた。

最後にもう一度話がしたい・・・

ハヤテ、呼びかけようとしたその時、

「ヒナギク」

突然名前を呼ばれて振り返るとそこには王妃が優しそうな笑みを浮かべて立っていた。

王妃はヒナギクを優しく抱きしめてヒナギクの耳元で

「ごめんね」とつぶやいた。

王妃はわかっていたのだ。

ヒナギクがお付きの執事に恋をしていたことも彼がまたヒナギクに恋をしていたことも・・・

ヒナギクは涙を流さないように必死で耐え、「ありがとう」と伝えた。



「王子がお見えになりました。」

クラウスの一言で王妃はヒナギクから離れた。  
ついに来た。

これですべてが終わるのだ。

ドアのところには正装した男の子が立っていた。

一步一步こちらに近づいてくる。

「初めましてスピード国第一皇子康太郎です。よろしく  
お願いします」

「初めましてハート国第二王女ヒナギクです。こちらこそ  
よろしくお願いします」

社交的な会話の後、そのものに結婚の意思があるか確  
かめる王家の儀式

結婚式はただの形式

本当の婚姻はこの儀式で行われる

これを交わしてしまったら絶対に後には引けない。

神官が朗々と述べていく誓いの言葉

「誓いますか？」

最後に問われるこの言葉

「ち、誓い・・・」

その時、バンッと荒々しくドアが開いてフードをかぶつ  
た二人組が入って来た。

「だれだ！！」

王は声を張り上げてどなった。

「今は大事な婚姻の儀を取り行っている。邪魔立てする  
ものは打ち首だ！」

使用人たちはおろおろしながらその様子を見ていた。

「いや、すまない」

その声を聞いて王の顔色が変わる。

「まさか、お前は・・・」

「久しぶりだね。ハート国の王」

「ああ、スピード国の王よ」

使用人、ヒナギク、そして康太郎までもが驚いて目を丸  
くした。

「しかしなぜそのような格好をしているのだ？」

「ん？ああ、自分を隠して調べ物をするにはこの格好が  
一番だからね。」

「ん、もう！そんな世間話している場合じゃないでし  
よ！！」

フードをかぶったもう一人が二人を咎めた。

「ああ、そうだったな。てなわけで私のお姫様の気分が  
悪くなる前に話しておこうかな」

スピード国の王は壁に並んでいる使用人たちの中からあ  
る一人を見つけるとまっすぐ向かった。

「名はなんという？」

「ハヤテです。」

「ハヤテ」、よい名前をもらったな。息子よ。」

「「「「」」」」

「あの、息子とは康太郎王子のことですよね？」

ハヤテが控えめに聞くと、

「いや、お前のことだよ。」

あたりは騒然となった。

ハヤテがスピード国の王の息子？

てことは王子？

周りは錯乱状態で当の本人はあまりの出来事に放心状態

「もう！ちゃんと説明しないからみんな話についていけないじゃない！！」

「いや、すまなかった。」

スピード国の王は自分の妻とハヤテを交互に見た。

「実は、お前が産まれた直後に運悪く盗賊に襲われてお前までさらわれてしまったのだ。王家の子どもなら高く売れるという考えからだろうが、産まれたばかりだったお前には買い手がつかず孤児院送り。私たちは必死で探したよ。国中駆けまわったさ。しかしお前は見つからずに16年という歳月が流れてしまった。そしてあのパーティーの日お前を王女の近くで見つけてな。それから

ずっと調べてた。そしてやっとお前が私たちの子であることがわかったんだ。たった一人の血のつながった、な」

「それはどうゆうことですか？」

ハヤテが王の子どもということについては今の説明で大体把握できた。

しかし「たった一人の血のつながった、な」の部分はどう考えてもおかしい。

それは今ヒナギクと結婚しようとしている康太郎のことだ。

「康太郎、お前にも言っておかなければならない。」

スピード国の王は決心したように話した。

「ハヤテが盗賊達にさらわれた時、私たちが命懸けで守ってくれた男女がいたんだ。その人たちは私の家臣でもありよき友でもあった。その人たちには生まれて間もない赤ん坊がいたのだ。それがお前だよ。彼らは死に際に『子供を頼みます。』と言ったのだ。私はハヤテが見つからない現状で考えた。お前を養子にして王子とすれば彼らの意思に報いることができる、と。今まで黙っていて本当にすまなかった。」

康太郎は黙ってをうつむいた。

王はさらに続けて言う。

「ハヤテが見つかったもお前と過ごした時間は変わらない

い。どうかこのまま私たちの子供でいてはくれないか？」  
康太郎が顔を上げると目にいっぱい涙をためていた。

「僕に血のつながった本当の両親がいたことを知っても僕を育て、愛情を注いでくれたこと、僕を家族として迎えてくれたこと心より感謝します。これからも僕はあなたたちの家族でいたいです！」

周りにいた使用人たち、王、王妃、ヒナギク、ハヤテも涙をこらえきれず泣いていた。

しばらくして落ち着いてくると婚姻の儀の途中だったことに全員気がついた。

しかし問題はハヤテと康太郎どちらと婚姻の儀を結ぶかということ。

スピード国の王はハヤテと康太郎を交互に見た後、目を閉じて数分。

考えが決まったのかゆっくりと目を開けた。

「・・・康太郎には悪いが私たちとしてはこの婚約は直接王家の血をひくハヤテと結ばせてもらいたいのだが・・・」

ヒナギクとハヤテは同時にお互いを見た。

「ハヤテはどうだ？」

ヒナギクは優しくハヤテにほほ笑んだ。

ハヤテも微笑み返す。

「はい、お願いします！」

## 最終話 「未来への翼」

ある国に美しい王女がいました。

王女という名に自由という翼をもがれ、大空に羽ばたけなかつた少女

しかし、ある少年が彼女の翼になったのです。

「恋」という羽が詰まった翼は彼女を大きく羽ばたかせました。

未来という名の大空に・・・

### 結婚式当日

美しい花嫁衣装に身を包んだヒナギクは、今までの思い出を確かめるように一歩一歩ハヤテに近づいていく。

ハヤテと出会ったとき

ハヤテが執事のなったとき

ハヤテに告白して、返事をもらったとき

そして二人だけの結婚式

一つ一つが大切にかけがえない思い出

愛しきでいっぱいの胸を高鳴らせながらハヤテの前に立った。

「きれいです・・・」

ハヤテが真顔で言うのでヒナギクは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

「バカ・・・」

ヒナギクが照れ隠しにそんな言葉をつぶやき、そっと顔を上げるとハヤテは「真実を言ったただけですよ？」と小さく笑った。

誓いの言葉が終わると指輪交換。

ヒナギクとハヤテの左手の薬指には、すでに一つ指輪がはまっていた。

ヒナギクはペンダントにしていたのを崩してもう一度指輪に戻していた。

ハヤテがその上からもうひとつ王家に伝わる本当の結婚指輪をはめる。

指輪をはめる。

ヒナギクも同じようにハヤテの指に通す。

誓いのキス。

あの結婚式とは違う涙が頬から唇に伝う。

すこししよっぱいその味はあの時のことを鮮明に思い出させてくれた。



式が終わり式場の外に出ると街はお祝いムード一色だった。

ハヤテと結ばれることをたくさんの人が祝福してくれる  
ヒナギクの心は歓喜で満ち溢れていた。

「ヒナギク」

もう呼んでももらえないと思っていたその名前をハヤテが  
呼んでくれる。

たったそれだけのことでヒナギクはうれしかった。

「ハヤテ」

これから先、楽しいこと、うれしいことがたくさんあつ  
てそれと同じくらい悲しいこと、つらいこともたくさん  
あると思う。

でもその苦しみを一緒に乗り越えていきたい。

ハヤテがもし翼をなくしたとき、自分がハヤテの翼にな  
りたい。

ハヤテと一緒に未来に羽ばたいていきたい。

この先もずっと・・・  
永遠に。

アフターストーリー

ここはスピード国

この国一番の大都市は、周辺の村から働きに来る人、買い物に来る人、たくさんの人たちで埋め尽くされ活気づいている

その都市から少し外れた場所に凜としてたたずむ一つの城があった

その城にはまだ年若い王とその王妃がいて、まだ未熟ながらも国をしつかりと動かしていた

く春く

「風雅！そんなところに登ったら危ないわよ！！」

まだ冬のおいが残る春の空に少女の声がこだました。

海をそのまま映したかのような澄んだアクアブルーの髪

と琥珀色の瞳を持つ7、8歳くらいの少女

その少女が見つめる先には・・・

「大丈夫だよ、風花！」

木の上で無邪気にはしゃいでいる同い年くらいの少年がいた

その少年も少女と同じアクアブルーの髪、顔立ちもよく似ている

違うところといえば髪の色と同じアクアブルーの瞳をしているところくらいだろう

少女の名前は風花、少年の名前は風雅というらしい

「でも、落ちたりしたらどうするの！！」

「へーき！へーき！！」

風雅は太い幹を探りながら幹の上を綱渡りをするように歩く

「ほら、怖くないから風花も来いよ！」

「絶対にいや！高い所なんて死んでもいいかない！！」

「いやいや、この城十分高い所にあるじゃない！」

「だって、ここはちゃんと足がつくじゃない」

「いや、まあそうなんだけどさ」

風雅は苦笑いしながら風花をみた。

「それに、お父様とお母様が見たらすっごく怒ると思うけど？」

「げ・・・父さんはいいにしても母さんが怒るのは勘弁してほしいな・・・」

風雅はいかにも嫌そうに顔をしかめた

「とうわけで私の言うことを素直に聞いていた方が身のためだと思うわよ？」

風花は不敵な笑みをこぼしながら風雅を見上げる

「ちえ、面白いのにな……。とうかお前なんぞそんなに偉そうに言うんだよ！」

「だって私の方が姉なんだから」

「ほんの少し先に産まれただけだろ……」

風雅が小さく悪態をつく。

「何か言った？」

「なんも言っていない。仕方ないなあ……」

風雅はしぶしぶ木を降り始める

枝をしっかりと握って足元を確かめるように慎重に。

その時！

バキッ

「えっ？」

枝がもろくなっていたのか、はたまた風雅の重さに耐えきれなくなつたのか風雅の体は支えを失い、重力に負けて真つ逆さま。

「わああああああああああああああああ」

ぶっかる！

風雅と風花が同時に目を堅く閉じたその瞬間。

黒い影が飛び出してきて風雅を抱きかかえた。

「ふー、危なかった。」

優しげな声

恐る恐る目をあけると……

「と、父さん！」

そう、そこにいたのは風雅、風花の父でありこの国の王、ハヤテだった

「まったく、高い所にいると必ず落ちてしまう遺伝子が

受け継がれてるのか？」

「それ、どういう意味かしら？」

凜としたよく通る声が三人の耳に響いた。

「母さん！」

「お母様！」

「ヒナギクも来てたの？」

いつのまにか立っていたのは、二人の母、ヒナギクだった。

「ええ、書類整理で疲れちゃったから少し目を休めよう  
と思つて。」

緑は目にいいからね。と

「それにしても、今の言葉は何かしら？」

「何って。言つたまんまの意味だけど？」

ハヤテは笑いながら

「ヒナギクも一番最初は空から落ちてきただろ？」

その言葉にヒナギクは恥ずかしそうに顔をそむけると話

題を変えるように風雅に話しかけた



「それにしても、あんなところに登ったら危ないでしょ。  
風雅」

ヒナギクは風花と同じことを言う

風花も言わんこっちゃないという顔

「全くだよ」

ハヤテも少し怒ったように言う

「・・・ごめんさい」

風雅も最初の強がりはどこへやら、雨に打たれたチワワのようになだれている

「まあケガがなくてよかったよ。春先とはいえ寒いし、中に入ろう」

ハヤテは笑顔で風雅に手を差し出す

「うん！」

風雅も笑顔でうなずきハヤテの手をしっかりと握った。

「ずるい！風花も！！」

「それじゃあ風花は私とつなごうか？」

ヒナギクは優しく手を差し出すと「わーい」と風花が手を握る。

城に向かう四人の前を少しあたたかい春の風が花びらを舞い上げていた。

# 海の勇者ライフセイバーズ 5・5話

副題 新世界の神話外伝1

著者・R I D E

海には勇者がいる。

その名をライフセイバー。人命救助を主な仕事とし、その傍ら日々の訓練としてのスポーツ競技として存在している。

まあ、ライフセイビングなんて今どきの人たちにはピンとこないから詳しい説明はいいとして。

とにかく、ライフセイバーは今日も戦っているのだ。

所は蒼い海。

ここに、ものすごい速さで泳ぐ少年がいた。

「まてええええ！」

…ものすごいなんて簡単に言うてはいけない。少年の泳ぐスピードは人並み外れており、カップの生まれ変わりかと思ってしまうくらいだ。

その少年、南野宗谷は全力でサメに迫っていた。人並みの大きさはあるサメに。

「くらえっ！」

そして、あろうことか宗谷はサメに向かって殴りかか

った。

これを受けたサメは…。

「あれ？」

なんとも応えていない。サメがぎろりと睨んだだけ。

そのサメは、宗谷を標的と定めると、顎を大きく開けて捕食しようとする。

「わあああああ！」

悲鳴を上げる宗谷。最速を誇る泳ぎをもってしても、今からでは逃げきれない。

死ぬ！そう思った時だった。

「死なねえよ」

どこからか男が現れ、宗谷と同じようにサメを殴り付けた。

それだけで、サメは海のかなたへと吹っ飛んでしまった。宗谷でも無理だったというのに、それをやれるとはすごい力の持ち主である。

「人類最強のライフセイバーがいるからな」

額に大きな傷のあるライフセイバー、戦部大和のおかげで今日も海の平和は守られているのであった。

「まったく、まだまだだな」

宗谷と共に浜に上がった大和は、まずため息をついた。

「あれぐらいのサメ一匹倒せないようでは、訓練にもならんぞ」

「誰もがお前みたいに素手でサメ倒せると思うな！」

どうやらこの二人、ライフセービングの訓練をしていたらしい。まだ見習いである宗谷のために、大和は色々と指導しているわけだが、その内容は人間にはほぼ無理なことである。そして宗谷は、その訓練の度に死線を超えているのだ。

常識を逸した訓練の後、宗谷はツツコミともとれる文句を入れる。

「バカ野郎！」

その後、必ずと言っていいほど大和に鉄拳制裁されてしまう。

「何度も言うが、ライフセイバーズに必要なのは攻撃力、誰かを助けるための力だ」

それこそ、大和は力を込めて大和に説いていく。

「そんな力も身につけられず、いつまでも軟弱なままでいてどうする？おまえもライフセイバーだというのに……」

そもそも自分から望んでライフセイバーになったという訳ではないというのに、上から物を言ってくる大和。彼を事あるごとにライバル視している宗谷はつい反抗的

な態度を取ってしまうが、大和は声のトーンを落として語りかけた。

「好きな子のために十年かけて努力してきたんだ。ならば好きな子に夢を見せることだってできるはずだろう」

それを言われると宗谷もつい納得してしまう。ぶっちやけライフセイバーとなったのも、その好きな子によるところが大きいからだ。

「悔しい思いはしたくないだろう」

付け加えるように、大和は意外なことを口にする。

「俺も、もうそんな思いをしたくないからな」

「えっ？それってどういう……？」

意味深な言葉に、宗谷はつい興味をひかれる。

「……そうだな、話してもいいか」

一番ライフセイバーになってほしい男だからこそ、大和もめったに話さない自分のことを話した。

「あれは、俺がまだ子供のころだった……」

十五年程前。

少年だった大和は、サスペンスドラマによくあるような断崖絶壁の上に立っていた。

人がそこから落ちれば必ず絶命するだろうというその場所で、大和は毎回飛び込みを行って体を鍛えていた。

その日も崖から海へ飛び込もうとした大和だが、その寸前にあるものを目撃する。

離れの崖上で、若い女性が猟銃を持って金色のヒョウと対峙していた。それも、かなり大きなヒョウと。

女性は銃口をヒョウに向けていたが、完全に怖気ついている。弾切れなのか日う気が根を引いても弾は出てこない。

対して、ヒョウはじりじりと女に迫り、崖つぶちにまで追い詰めている。

女とヒョウ共に血まみれになっており、緊迫さを物語っていた。

常人なら息を呑む光景だが、大和は冷静に事の成り行きを見ていた。一触即発な雰囲気はこちらにも伝わっていたからだ。

だがこの膠着状態はずっと続くわけでもなかった。

ヒョウが女に向かって飛びかかる。その勢いのまま女ともみ合いながら崖から転落していった。

「まずいな」

大和はためらうことなく海へと飛び込んだ。血まみれなところを見るとかなり深手を負っているのだろう。そんな状態であるの高さから落ちてしまえば死んでしまう。助かる見込みがあったとしても、この辺りの海は潮の関

係で死体は上がらないのだ。自力で浮かぶことができない以上、そのまま沈んで溺死ということになるだろう。

だから大和は、全速力でヒョウのもとで泳いでいった。

人影一つも見当たらない浜に、女とヒョウを引き上げた大和。

ヒョウまで助けなくてもよいと普通の人ならそう思うだろう。しかしこのヒョウは自分の命も顧みずに飛び込んだ。まるであの女と心中するかのよう。

ただのヒョウではない。何か事情があるのだろう。

とりあえず女もヒョウも一命を取り留めている。ならば手当をした後何かしら聞き出そう。そう思い大和が病院へ連絡を入れようとした時だった。

「すごいな君は」

どこからか大人が現れ、大和へと近づいてきた。しかも一人ではない。十人ほどの男たちが大和たちを取り囲んでいる。

「人間とヒョウを抱え込んで、しかも浮力の少ない海をここまで泳ぎ切るとは大した体力だ」

オールバックの髪型に、額には小さなこぶのようなのが生じている男が大和を称賛する。彼だけ年齢が他の

人物よりも上でありそんなことは男たちが彼と少し距離を取っていることから、男たちのリーダー格かと思われる。

「よくやったな。彼女たちは我々に任せてもらおう」

人のよい笑顔で大和をねぎらう大人たち。

だが大和は見抜いていた。この男たちは、何かを隠している。それが何なのかはよくわからないが、そのためには手段を選ばないであろうということも。

「それはできません。あんたたちはどうも胡散臭いからな」

それを聞いた男の眉が、ピクリと動いた。

「できれば穏便に済ませたかったが、仕方がない」

その言葉を合図に、男たちが身構える。

「力づくでも従ってもらうぞ」

男たちは一斉に大和を抑えつけようとする。しかし、まだ少年でも高所から飛び込みができる人とヒョウを抱えて泳ぎきる力を持つ大和を相手にすると、中々思うようにもいかない。彼の抵抗に、男たちは返り討ちされていた。

だがそれも、束の間であった。

リーダー格の男が拳銃を取り出し、大和に向かって発砲した。

弾丸は大和に命中した。しかし想像した痛みはなく、

針に刺されたように感じた。

「即効の麻酔針だ。しかも量が多いぞ」

その言葉通り、大和は途端に睡魔に襲われた。

「私たちの秘密を知られるわけにはいかない。本来なら殺しておくところだが、子供を相手とすると若干良心が痛むのでな…」

薄れゆく意識の中、大和は最後にそれを耳にしていた。

目が覚めた時、浜には大和一人しかいなかった。男たちも、女も、ヒョウも消えていた。

大和はこのことを警察には話さなかった。

話しても無駄だとわかり切っていたからだ。子供の言うことだと一笑に付せられるとわかり切っているし、あの男たちが根回しをしているだろう。だから大和は、このことを胸の内にしまっておくことにした。

「そして俺はその無念さを糧に、更に力をつけていき…」  
「ちよっと待て！」

話が終わりそうところで、宗谷が待ったをかけた。

「この話、ライフセイバーと関係ないじゃないか！」

至極まっとうな意見である。海での救助場面は素直に

聞き入れたが、それから後のことは違う問題ではないだろうか。

「何を言う！」

しかし大和はとても重要であることのように語る。

「家に帰るまでが遠足であるように、救難者に手当てをし無事に目を覚ますまでがライフセイバーの仕事だ！あんな中途半端では救助したことはないならん！」

妙な理屈に押され、言葉に詰まってしまふ宗谷。しかし、ツツコミ所は他にもあった。

「そもそも、なんでそんなところにヒョウがいたんだよ！」  
そう。ヒョウが出てきたこと事態が現実感を薄めているのだ。

「ヒョウはネコ科の動物で、通常でも大型のものは七十キロにも満たないと言われていいるが……」

さりげなく意味のない知識を口にする宗谷。これはもはや自慢なのだろうか。

「けど、話を聞く限りそのヒョウって通常の二倍から三倍の大きさだったんだろ？それって本当にヒョウだったのか？」

あの場にヒョウがいたこともさながら、そんな規格外の大きさを持つヒョウなど実在しない。本当にヒョウがその時存在したのだろうか。

不信しかだけない宗谷に、大和はこう言った。

「そうか。じゃあヒョウじゃなくてトラだな」

「おい……」

あっさりと変えてしまった大和に、宗谷は脱力してしまふ。

「あの人にそんな記憶力ないわよ」

そう言ってきたのは、大和の同僚である朝風かすみである。

「記憶力がないから、ヒョウだかトラだかもわかんなくなっているのよ。たぶん両方見比べても彼にはわからないわ」

容赦のない物言いに、たじろいでしまふ宗谷。

「けど、あの人の過去はよくわからないから、本当にそんなことがあったのかもしれないわね」

いつの間にか大和は遠くへと行っていた。かすみと共にその背を目で追う宗谷。

考えてみれば、自分は大和のことを知らない。かすみでさえ知らないというのだから、彼はまさに謎に包まれた人物といえよう。

少しだけ、大和のことについて宗谷は興味を抱くのであった。

「麻衣ー！早くー！」

「はーい！」

黒髪のショートカットの女の子が、大和とすれ違った。しばらくしてから、大和は後ろを振り返った。

今の少女と、どこかで会った気がするのだが…。

「気のせいか」

錯覚だと思い、大和は自分の海の家へと戻ろうとした。

「兄さん…？」

大和が自分の弟と名乗る少年と出会ったのは、その時だった。

幻の第6話へと続く…？

## ふたつの孤独

著者：ロッキー・ラックーン

『ねえお姉ちゃん：お父さんとお母さんはどこ？』

『ヒナ：落ち着いて聞いてちょうだい。お父さんとお母さんはね：』



「——ッ!？」

ガバリと飛び起きた。汗が額から垂れ、動悸が激しく、息もあがってしまった。心地よい目覚めとは到底いえないものだった。

久々に「あの夢」を見てしまった。私の実の両親がいなくなってしまった日。多分、一生忘れる事が出来ないであろう出来事だ。

ふと時計に目をやってみる。針は午前一時を差している。起床する時間にはまだまだ猶予があった。

「水でも飲むかな：」

小さくつぶやき、同居人の眠りを妨げない様に自室を出て向かった先は台所。コップ半分ほどの水を乾いたノ

ドに流し込む。起きかけの頭に冷水が妙に刺激的で、完全に目が冴えてしまった。

用事を済ませ台所を後にした私の足は真っ直ぐに自室に向かう事は無く、寄り道する事を選択していた。

「：あれ？」

寄り道した先は、アパートの庭先。ここで少し夜空を見上げて心を落ち着かせようと思つての行動だった。

して、私はなぜこんな声をあげてしまったのか。それは、こんな真夜中には相応しくない人影が庭の中心にポツリと存在していたからだった。

「あら、ヒナ？どうしたのですか、こんな夜中に：」

「それは私のセリフよ、アリス？」

人影の主は、アリス。私がこのアパートで暮らすきっかけとなった張本人。そして、記憶と不思議な力を無くしてしまった天王州さんの仮の姿。普段は夜9時には寝て、お昼までは起きて来ない寝ぼすけさんがどうしてこんな所に？

「ちよつと寝付けなくて：夜空を見ながら考え事をしてましたの」

「そうなんだ。私も似たような所よ」

「では、眠くなるまで少しお話をしましょうか？」

「うん」



縁側に並んで座る私たちの姿は、他の人の目にはどんな風に映っているのだろうか？

そんな事を思いながら、眠れない夜は更けていく…。

### 【ふたつの孤独】

「改めてこの3ヶ月間、ヒナには『ママ』としてお世話になりましたわね」

「そんな事無いわよ。むしろ私の方が貴女にアドバイスされっぱなしだったわよ」

「フフツツ、それもそうですわね」

半ば無理矢理突入したお姫様との同居生活も、間もなく終わりを迎えようとしている。というのも驚ノ宮さんいわく、元の姿に戻るための力の95%ほどがアリスの身体に蓄積されたとの事だからだ。アリスが元の姿に戻れば私は御役御免となり、このアパートにいる理由も無くなってしまう。

この3ヶ月間でアリスにはお世話になりっぱなしだった。…特にハヤテ君との仲の事で。素直になれない私の背中を誰よりも押ししてくれたのはアリスで、ウジウジと

悩む私の愚痴を誰よりも聞いてくれたのもアリスだった。彼女の存在のおかげで、この生活がどれだけ充実したものになったのか、正直なところ計り知れない。

「私もヒナのおかげで楽しい時間が過ごせました。美味しいものもいっぱい食べられましたし…。またラーメンと一緒に食べに行きたいですわ」

「そうね、あそこのラーメンは美味しかったわね」

私は私で、世間知らずのアリスに色々教えてあげるのが楽しかった。日一日と成長していくアリスの姿に、なぜだか知らないけど私の方が誇らしく思っていた。私のお姉ちゃんもこんな気持ちだったのかなと想像した。

「短い間でしたが、ここでの皆さんとの生活はとても幸せなものでした。朝起きたらマリアさんの美味しいごはんが頂けて、昼間はハヤテや他の皆さんとおしゃべりしたりつまらない事でケンカしたり出来ましたし、夜はヒナと一緒に部屋でしたから寂しくありませんでした」

「私も貴女と会えて、本当に良かった。最初は色々あったけどね…」

「フフツツ、ヒナがハヤテに気持ちを伝えるのを見られない事だけは、少し残念ですわね…」

「んもう、貴女がそれを言う？」

ふたり笑い合って同じ空を見上げる。それきり私たち

の会話は途切れ、私の手を求めるアリスの小さな手を優しく握り返す。

東京23区内にしては街灯が少ないこの地区は、夜になると見事な星空が眺められる。今夜も天気が良く、時折流れてくる雲から見え隠れする星々が幻想的で…昔のロックミュージシャンの言葉を借りれば、「雲の切れ間にちりばめたダイヤモンド」のように綺麗だった。



「ヒナ」

「ん？」

それから5分経ったか、10分経ったか。あまりにもゆっくり流れていく時間が私の感覚を狂わせる。長く続いた沈黙の壁を破ったのはアリスだった。

「貴女にだけ、聞いて欲しい事があります」

「何かしら？改まっちゃって…」

繋いでいた私の右手を、アリスは両手で自分の胸の前に持っていく。その両手は微かに、だけど確実に震えているのが私にも感じ取れた。

「本当に、ヒナだけにしか言えません。ですから、他の方には…」

「うん、大丈夫だから。ハイ、おやくそく♪」

アリスの言葉を遮って、空いている左手の小指をさし出した。彼女の表情も多少和らいで、その小さな小さな左手の小指をさし出して指切りした。多分かなり重い話になるんじゃないかと思う。雰囲気的に…。この「ゆびきりげんまん」は少しでも緊張をほぐすためにも思っていたものだった。指切りの後、深呼吸をして心の準備をするアリスの仕草が妙に可愛らしかった。

「では、お話ししますわね。まず、この私…アリスは『天王州アテネ』の仮の姿…元に戻る事だけが私に課せられた使命です。それはご存知ですわね？」

「うん」

「ですが、『天王州アテネ』の記憶の無い今の私には『アリス』だけが唯一頼る事の出来る人格です。記憶も力も身体も、今ここにあるものだけが私の世界の全てなのです」

「それって…あつ…」

口から出かけた言葉を慌てて飲み込んだ。頭に浮かんだイヤな状況を振り払おうと、必死に別の可能性を模索した。

「そうです。今になって、私は怖くなってしまいました。元に戻ってしまうと、アリスはいなくなってしまうます。」

この幸せな日々から私だけいなくなってしまう。『アリス』という存在が無い日常が皆さんの普通になってしまう。…消えてしまうのが怖いのです」

「アリス…」

イヤな予感的中した。アリスが元の姿に戻ってしまう事で、アリスという人格が消えてなくなってしまう。彼女のいない日常を「普通」と呼ばなくてはならなくなってしまう…。

「分かっています。本来この身体は『天王州アテネ』のもの。仮の姿にしか過ぎない私がこんな事を言うのは間違っています」

「間違っていますかいいわよ！」

思わず声を荒げてしまうけど、当然の事だと思う。彼女の言葉にどれだけ励まされた事か、彼女の存在にどれだけ成長させてもらったか、その彼女が消えてしまうと言い出している。冷静でいられるはずなんて無かった。

「でも…」

「今、貴女がいない生活を想像してみたらね…凄く寂しいと思った。多分、他の皆は『元に戻った』って喜ぶかもしれないけど…私にとって、貴女はアリスでしかないもの。天王州さんとは別人よ」

「……」

「言われて初めて気付いた。私はなんてバカだったのかしら…それって、死んじゃうのと同じじゃない…。イヤよ！元に戻って欲しくなんかない。スキな人がいなくなるなんて、もうイヤよ…」

その小さな身体が折れそうなくらいに強く抱き締めて泣きじゃくる。この確かな温かさを持った存在が消えてしまうだなんて事は、信じたくなかった。

さっき見た夢を思い出した。あれは、予兆だったとしてもいっただろうか。愛する人を失う悲しみをまた味わう事になる。それを分かっている止められない自分の無力さに、悔しくて涙が止まらない。

「ヒナ…」

よしよしと、アリスは小さな手で私の背中をさする。嗚咽で乱れきった呼吸が少し収まってきた。これではどちらが母親役か分かったものじゃない。

「ありがとうございます。ヒナにそう言って貰えるだけで、アリスはとても幸せ者です。でも、こうして私の事を大事に想ってくれる貴女がいるように、『天王州アテネ』の帰りを待っている人もいます」

「！！」

アリスの言葉に、一人の男の子の顔が浮かび上がる。その人にとって、天王州さんはスキな人。その人は現在

進行形で、大切な人がいない毎日を過ごしているという事に気付いた。その人が時々見せる寂しさを隠すような笑顔。それを見るたびに、私はやりきれない気持ちで胸が痛くて仕方が無かった。

「そうね。ハヤテ君にこれ以上、寂しい思いをさせちゃうのもいけないわね…」

「ええ…」

涙に濡れた瞳を再び空へと向ける。ふわりゆらりと瞬く星々は、どことなく温かさを感じさせた。

「でも、これだけは覚えておきなさい」

「…なんでしょうか？」

再び顔を合わせる。月明かりが照らす端正な顔立ちに、初対面の時にお人形のようにだと思った場面をふと思い出した。

「私はアリスと過ごした時間を忘れない。絶対に忘れない！」

「その言葉…信じてもいいのですか？」

「貴女を信じる私を信じなさい！」

声は静かに、それでも力強く言い放つ。それだけ、私は自分の発した言葉に自信を持てた。私の言葉に、アリスの顔はにわかにはこころんだ。

「ヒナの言葉、確かに私の心に届きましたわ。誰かに愛

されている…それだけで、こんなにも心が軽くなってしまふものなんですね」

「そうよ。人の想いの力って、本当に強いんだから…」

アリスの前髪が涙で濡れないように軽く梳く。相変わらずお人形のように可愛くて、その名前に恥じない気高い意志を感じる瞳だった。体重を全て私に委ねている様に、私を頼りにしてくれているのだと嬉しくなった。

「今日は…ヒナの布団と一緒に寝ても良いですか？」

「ええ、もちろん良いわよ」

「やりにい！ですわ♪」

屈託の無い笑顔に私の心も和らぎ、部屋へと向かうべくアリスの手を引く。繋いだ手からは震えが消えていた。「私と一緒に寝るからには、起きるのも私と一緒にじゃないとダメよ？」

「むむむ…」

ちよっとしたイジワル。と言っても、今日に限っては私も睡眠時間が短くなってしまっているので、いつも通りの5時に起きるつもりは無い。只今の時刻、午前2時。…6時ごろには起きようかしら？

「ヒナは睡眠時間が短すぎるのではなくて？眠る事で女性ホルモンの分泌が活性化されると聞きますわよ？」

「…へ？」

意外な答えが返って来た。それも、私のコンプレックスである「身体のある一点」を凝視しながら。

「桂ヒナギク、睡眠6時間。天王州アテネ、睡眠7時間半…」

「!!」

とどめを刺された。ていうか、何で記憶が無いのに天王州さんの睡眠時間を知ってるのよ!?

「そのあたりは、ハヤテから色々…。元気で活動的なのもヒナの魅力ですが、年頃の乙女としては発育の方も…」

「ああもう、分かった!分かったわよ!!7時半ね。

学校あるからそれが限界よ!?!」

「ウフフ、良い判断ですわ♪」

すっかりいつもの調子に戻ってしまった。まあ、それが一番なのよね…。

部屋に着き、アリスの枕を取るために寝床となる押入れを開ける。天蓋付きの寝室は純和風の部屋の片隅で相変わらずの異空間を演出していた。今さらになって、かの有名な22世紀から来たネコ型ロボットの姿が頭に浮かんだ。

「じゃ、電気消すわよ?」

「はい」

枕を置き、私の布団でふたり向かい合って横になる。

もぞもぞと寝姿勢を整えるアリスの仕草が愛らしい。お姉ちゃんと一緒に寝ていた頃を思い出して、自然と笑顔がこぼれてしまう。

「ヒナの匂いがして、とつても安心しますわ…おやすみなさい」

「ウフフっ、おやすみ」

程無くして聞こえ始める寢息に安堵し、私も眠りについた。私の温もりを求めてくれる小さな小さな存在に、身体と心が温かくなった。

寂しいと思う気持ちも、ふたつ集まればこんなに幸せになれる。それは、人間をどんな事よりも支えてくれる力になるものなのだ。



「あ…おつきくなってる!?!」

「ヒナあり…ほんの3ミリだなんて、誤差の範囲ですよ?」

「うっ、うるさいうるさいうるさい!ちゃんときくなくなるもん!」

アリスの助言によって睡眠時間を改善した事で、これ

から私の胸囲は驚異的な増加を見せていくのだった。(本当に！…何ミリかずっただけ！)

お父さん、お母さん。私ね、今いる場所(ここ)が大好き。一緒に暮らす人たち、私を見守ってくれる人たちが大好き。

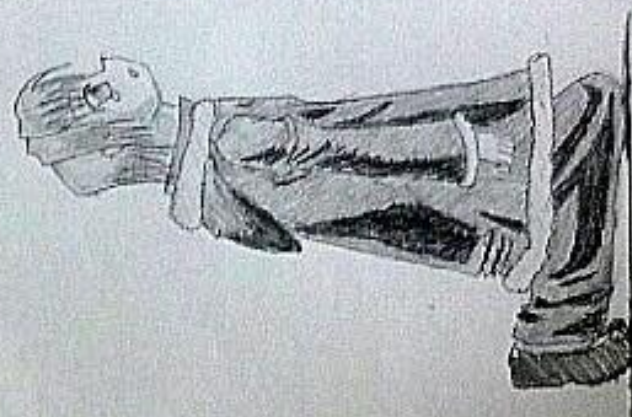
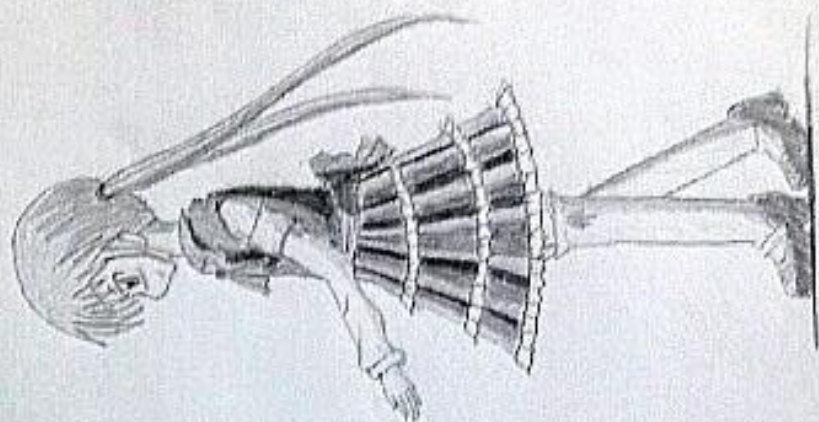
でも、それと同じくらい貴方たち両親が好きだった。今でもそうよ。

いつかきっと、私を愛してくれた事を感謝しに行くから。それまで、私の事…覚えていてね！きっと、きっと、忘れないでね！！

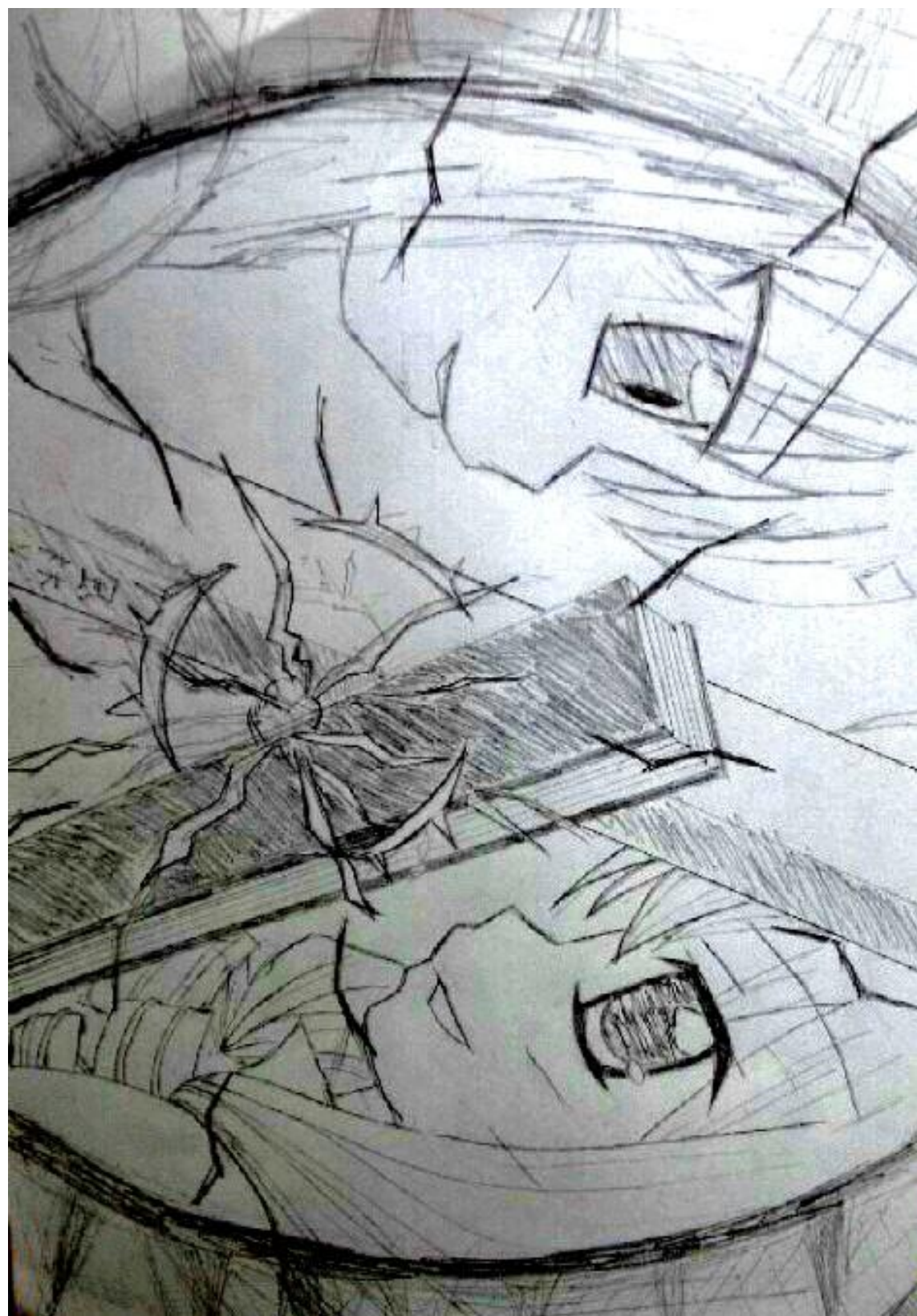
おわり

合同小説本 vol.2

# ルドルフのこどく!



大和屋







## 著者あとがき & メッセージ

### 【ネームレスさん】

初めましての人は初めまして。知ってる人はヤッホー。ネームレスです。

いやー、今回は推薦枠というもので棚ぼたラッキーで書かせていただきました。お題はサタンさんからいただきました。

### 【三千院家の日常+タマとシラヌイの絡み+ほのぼの】

自分じゃ思いつかない発想で、制作当初は苦勞して、最後の最後まで怠けてたんですよね(笑)

今回の小説はタマ主人公です。動物が主人公の物語を自分で書くことになるとは思わなかったので、とてもいい経験になりました。

後書きって何書けばいいかわかんないですね(笑)何を話したいか特に固めず事実だけを。パッと書いた感じになっちゃいました。最後にそれっぽいこと言って締めたいと思います。

今回、合同小説本 vol.2 を企画してくださった双剣士さん。指名してくださったサタンさん。このように楽しい企画をやらせていただきありがとうございます。

この合同小説本を見た読者さん。どうでしたか？少しでも「面白い！」と思っただけなのなら幸いです。こちらにも書いた甲斐があるというものです。

皆さん、本当にありがとうございます。

それでは、また機会があれば。

## 【サタンさん】

こんにちは、サタンという止まり木で活動している者です。

今回の第二回クイズ大会という企画において入賞し、ネームレスさんをリクエスト権で指名させて頂きました。

SSの内容を以下のテーマに縛って、ネームレスさんに執筆を依頼しました。「ほのぼのした三千院家の日常」「タマとシラヌイの絡み」という物です。

このテーマを元にどのような物語を創作されるのか、私は楽しみにしておりました。

そしてネームレスさんが完成された作品は「台本形式」という私の予想を良い意味で裏切った書き方でした。

「台本形式」という書き方は旧ひなたのゆめから初投稿の方(私も含めて)が主に行ってきた書き方の一種です。

情景描写が描けない分、キャラクターの台詞をいかに工夫するかが問われるもので、一般的な書き方とは違う面白さを生み出す書き方だと思います。

依頼したSSを読んで行くと原作を思い出すような流れを感じました。

ナギの無茶ぶり↓ハヤテの押しの弱さから断れずに実行する↓不幸に巻き込まれる↓解決と思いきや繰り返される不幸

という原作ではテンプレートとなっている流れでしたが、

それにハヤテらしさを感じて、とても好感が持てました。

リクエストして書いて頂いたSSを楽しく読ませてもらいました。

ネームレスさん、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

また、このようなも合同本の企画して頂いた双剣士さんにも感謝致します。  
本当にありがとうございます。

ひなたのゆめの復興と、止まり木の更なる賑わいを願って後書きを締めさせていただきます。  
それでは、また。

### 【みっちょよさん】

こんにちは！初めましての方は初めまして！みっちょよです！

このたびは転載枠の「私は王女、あなたは執事」で参加させていただきました！  
この小説は私が初めて書いた長編作品で至らないところだらけだと思います。

でも、自分の中ですごく思い入れが強い作品です！  
この小説を思いついたのはあるラノベがきっかけです。

アニメが好きな方なら名前くらいは聞いたことあると思うラノベなのですがその世界観に一瞬で心を奪われてしました。

この作品の身分違いの恋、異世界のような設定はそのラノベに影響されています。

パラレルの作品なのであまりハヤテの世界観を感じさせないかもしれませんが演劇や「もうひとつのハヤテ」みたいな感じで楽しんで頂けると幸いです！

最後に、またこのような素晴らしい企画を計画してくださった双剣士さん、そして「止まり木の皆様」。  
本当にありがとうございます！

感謝の言葉とともにこのあとがきを締めさせていただきます。

【大和撫子さん】

絵を描くのが趣味だったのでそれが活かせる場があつてよかったです。

【ピアノフォルテさん】

皆様様方、合同本では初めました。になりますね。

止まり木では小説の執筆及び、にイラストの投稿を行っているピアノフォルテと言います。今回は「私は王女、あなたは執事」にヒナギクのイラストを献上させて頂きました。

いや、良いですね。絶対今の私には描けない小説だと思います。センチメンタルでだけど最後はハッピーエンド。

あまりに私を作る小説作品とかけ離れているので（↑全くの余談ですが私のPCは変なIME覚えてます。勇気と打つとまず幽鬼。同刻と打つと真っ先に慟哭が出てくるあたり、我ながらどうかと思います）、それに合わせる為に普段とは描き順をかなり変えて作った作品だったりします。……いかがでしょうか？

素敵な小説に見合う作品となれていたなら恐悦至極。まだまだと仰るなら……ハイ、精進します……。

最後に、このような素敵な企画を計画して下さった双剣士さんと、可愛らしい小説を描いて下さったみっちよさん。そしてこの本を見て下さった全ての方へ「ありがとう」と、お礼と感謝の言葉を述べて終わりとさせて頂いたと思います。

それでは、長々と失礼いたしました。

## 【RIDEさん】

どうも、RIDEです。

第2回も参加させていただきました。

ライフセイバーを扱いましたが、どうでしたか？

まずは、前回に比べて短くて済みませんでした。

本日は執筆中の作品のリメイクと行きたかったのですが、時間が足りなくなり、急遽この短編を書きました。

なお、副題にあるようにこの小説は現在執筆中の小説の外伝的な小説となります。ということは、この小説も他作品クロスものということになります。

クロスさせている作品は、「闇のパープル・アイ」という作品です。執筆中の作品にも登場予定です。いつになるかわかりませんが。

この作品は古い少女コミックです。どんな内容かは自分で調べてください(不親切だな…)。最後に、今回も企画に参加する機会を作ってくれた双剣士さんに感謝の意を記します。

## 【ロッキー・ラックーンさん】

こんにちは、ロッキー・ラックーンと申します。

元祖ひなゆめから止まり木に移って、はや一年弱。毎週行われるチャットや、様々な企画を楽しま

せて頂いてます。新参者だった私もようやく皆様の輪の中に溶け込めてきたような気がします。管理人の双剣士さんには感謝の言葉が尽きません。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

さてさて、SSについて。元の姿に戻る直前のアリスとヒナギクのやり取りを妄想してみました。テーマは「絆」です。タイトルには「孤独」とありますが、孤独もふたつ揃えば寂しい事なんて無いのだよ…と感じ取って頂ければと。

もともと、アリスの「ママ」として同居をせまられたヒナ。「血の繋がり」だけが親子関係の全てではない事を身をもって知っている彼女であるから、アリスに対して自身の持てる限りの愛情を注いでいるという前提（＝妄想）のもとのお話です。

アリスの方はというと、アテネとしての記憶が無い。つまり、アリスという人格は何にも干渉されない独立した人格であると私は考えています。デス●ートの記憶を失ったラ●ト君のような状態…と言って通じるかどうか。だからアリスにとって、アテネに戻った後というのは死後の世界のような物という訳なのです。

そのアリスの姿でアパート生活を楽しんでしまったから、アテネに戻る＝自分が消えてなくなってしまう後の世界の事を考えて怖くなってしまいました。誰にもその事を打ち明けずに、一人眠れない夜を過ごしていたらヒナが…と物語に続いていく事になります。

アリスはこの1年ちよいで急激に好きになったキャラクターです。止まり木にて細々と続けているSSで活躍してもらっている内に、いつの間にか私の中で、ヒナに次ぐ重要キャラとなっていました。28巻での登場以来、ヒナとの母子的な絡みをずっと待っているのですが、なかなか見られませんね。畑先生は私を焦らしているに違いない。(笑)

では最後に、読んで頂いた皆様、止まり木の皆様、ありがとうございました。またの機会にお会いしましょう。

## 編集後記

止まり木クイズ大会の景品として始まった合同本企画が2回目を迎えました。今回は前回以上の激戦を勝ち抜いた5名の小説に加えて、有志2名の方から送られた素敵な挿絵・表紙・巻末イラストが合同本を彩ってくれています。たったひとつしかない「既存転載枠」が最大目玉商品としての権威を取り戻してくれたようで、企画した私としても嬉しいです。

参加者及びこの合同本企画を知った方からは早くも第3回を希望する声が上がっています。期待してもらえるのは有難いのですが、こうやって熱のこもった作品群を読んでいると「自分も参加してみたい！」という思いがふつふつと湧き出てきまして、出題者・兼・編集者としてしか合同本にタッチできない自分の立場に頭を悩ませているところです。かといって「管理人枠」なんてのを先に設けてしまったら、「自分の個人誌へのゲスト参加者を募集しておきながら、希望者をクイズで選別している傲慢不遜な奴」って後ろ指を指されるのは目に見えているしな……なんとかクイズ自体に参加する方法はないものか、真剣に思案しているのです。

ともあれ、第3回クイズ大会は十一月に開催の予定です。次回はクイズ終盤での逆転が起こりやすくなるよう、配点に工夫を凝らす予定。ご期待ください。

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.02

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2013年9月9日